シンガポール広島事務所初代所長体験記

～地方自治体の海外事務所、一人事務所の初代事務所長としての３年間～

１９９４年４月

橋本　康男

(160594)

目　　次

プロローグ …… 1

Ⅰ　シンガポール広島事務所の開設と事業展開 …… 2
シンガポール行きを希望した訳
設立準備
赴任
テレホンカード …… 3
靴屋の話
出入国管理局での失敗 …… 4
ないないずくしのスタート
机の購入
シンガポール製造業者協会チン事務局長
夫婦でのレセプション初参加 …… 5
地方自治体の海外事務所の役割
金は出さないが汗をかく …… 6
見積もり取りを断る
看板をかかげることの意味 …… 7
経費要求と「バンコクへでも移すか」
ひろしまフェアと花火
シンガポールポリテクニック校への図書寄贈とその後の交流 …… 8
事務所のアシスタントの雇用 …… 9
海外事務所におけるアシスタントの役割
シンガポール政府外務省外務政務次官への知事表敬訪問 …… 10
シンガポール政府外務省高官との話
アジア各国の日本人マネージャーの地元スタッフ評価アンケート …… 11
事務所移転
事務所用車の購入 …… 12
為替変動に一喜一憂 …… 13
広島からの来客対応
広島への現場の事情説明
青年交流～祭りとコミュニケーション

Ⅱ　国際交流について …… 15
双方向で継続的な交流
儀礼的、覗き見・体験的な国際交流
継続と責任
一方的、恩恵的な国際協力 …… 16
対等な関係で双方が学び合い、双方にメリットがある継続的な交流 …… 17
国際交流の一般的効果
広島へ受け入れる国際化
シンガポールの地元中小企業ミッション広島派遣 …… 18

Ⅲ　海外で暮らす …… 19
海外で暮らす
日本の２倍歳を取る
車の運転
地元の人との付き合いと４つの正月 …… 20
国際結婚
海外で働く日本人 …… 21
生徒数2500人の日本人学校
学習塾 …… 22
ヤマハ音楽教室
わがまま侮りがもたらすもの

Ⅳ　シンガポールの紹介あれこれ …… 24
広島市よりも小さい面積に広島県の人口
多民族国家、団地国家、強力な政府
四つの公用語 …… 25
裏通りの安心感 …… 26
東西南北の交差点 …… 27
エクセレントリーダーとエクセレントスタッフ
シンガポール政府で働く日本人 …… 28
被占領５０周年
シンガポールにおけるヒロシマ …… 29
南向きの部屋
暑くて寒い国 …… 30
シンガポールの雨
外食社会 …… 31
救急車と消防車
カラオケ …… 32
スポーツ

V　東南アジアは一つひとつ …… 34
マレーシアとインドネシアの大きさ比べ
一人当たりの国民総生産
東南アジア各国出張
バンコクの非常事態宣言 …… 35
マレーシアとマハティール首相
インドネシアと赤味噌 …… 36
フィリピンの光と影 …… 37
ベトナムの憂鬱
サラワクの息吹 …… 38

VI　幕切れ …… 39
任期延長意見書
忘れ得ぬ人々
シンガポール女性会議連合会タン会長
別れ …… 40

エピローグ …… 41

シンガポール広島事務所初代所長体験記

プロローグ

今日で３年近くのシンガポール生活を終え日本へ向かって離れるという日、広島からの訪問団に対して、シンガポール広島事務所長としての最後となる概況説明をしていた。この地での日々が思い起され、幾度もこみあげてくる感情と戦っていた。言葉が止まりそうになり、言葉がうわずりそうになるのをこらえながら、それは悲しくもありまた甘い感情でもあった。

広島からの視察団、交流団に対して幾度となく繰り返してきた、シンガポールを中心とする東南アジア地区の概況及びシンガポール広島事務所の活動についての説明ではあったものの、地元の人々との暖かい交流、手探りでゼロから積み重ねてきた事務所活動を振り返る部分では、最後ということもあり、夢中で取り組んだ時間が一気に押し寄せてきた。

シンガポールでの日々は私にとって、それほどまでに大きく大切なものだった。県という組織に働き、その安定志向の組織の中でもがいていた自分にとって、自分のすべてを出して取り組むというのは、厳しくはあるものの幸せな体験だった。それがいつかは終わるものと知ってはいたはずなのに、最後の一ヵ月までは終りを考えずに突っ走っていた。

人は組織の中で過ごしていく中で、そこで生きる知恵を身に付けていく。それは、仕事のやり方であったり、人間関係であったり、趣味の世界であったり、所属する組織とその中での自分自身の位置付けによって異なってくる。それが継続性、安定性、公平性を志向する行政組織であれば、それは往々にして誤りや失敗を恐れるが故に減点主義とならざるをえず、そこで働く構成員もそれに順応してしまう。

しかしながら、どのような組織環境で生きるにしても、その基本は、自分自身が何を新たに生み出すことができるのか、あるいは、自分自身がどれだけ挑戦的であり得るのか、という点だと思う。つまり明日の自分を信じて、「張り」をどれだけ保っていけるかということではないかと思う。

いつも不安で、いつも何かに逃げ込みたいと思いながらも、辛うじて努力を続けてきたシンガポールでの日々。けれども、そんな単純なことが、思いもかけない評価・反応としてシンガポール最後の段階で感じられた。何人もの仕事のパートナー、友人からの心のこもったお別れのレター、食事への誘い。暖かい言葉。そして貴重な時間。個人の信用、魅力を大切にしていく社会ならではの、意外なまでの思いやり。

意欲と好奇心とを大切にしながら筋の良い仕事をしていくのは容易なことではなく、それは海外でも同じだと思う。３年前、車なし、アシスタントなし、事務所なしのないないずくしでスタートして以来、シンガポールの人々の好意に助けられながら過ごしてきた時間の長さ、そこで得たものの大きさを、改めて振り返えさせられた。

Ⅰ　シンガポール広島事務所の開設と事業展開

シンガポール行きを希望した訳

シンガポールに新たに広島事務所を開設する話が出たのは、１年間の伊藤忠商事への派遣研修から帰り商工労働部で企画調整の仕事をしていた３年目のことだった。仕事自体はおもしろく県の中では恵まれていたとは思うものの、商社で実際に自分だけの商品を持っての営業活動を経験させてもらった後では、県の仕事のやり方、雰囲気に戸惑うことも多く、再び外の社会へ出るチャンスを探していた。

それまで、特に国際関係に興味があったわけではなかったものの、伊藤忠時代に始めた英語の勉強を続けていたおかげで、前年に英検準１級には合格していた。

安定志向の組織の中で、このままではあと数年しか今の挑戦的な気力が続かないのではないかと悩んでいた時だけに、新しい仕事に自信はなかったものの、ぜひ行ってみたいと思うようになった。

設立準備

’９１年の３月末にシンガポール行きが決まり、それまでの仕事を引き継いで準備に入ってみて驚いた。すでに知事が同年８月の事務所設置を対外的に公表しているというのに、シンガポール政府とはもちろん、日本の外務省、自治省とも全く接触もしていない。他県の事務所が一千万円単位の予算で運営しているというのに、初度調度品等の立ち上げ経費を含めて初年度予算は３５０万円。事務所は、広島関係の企業の現地工場の事務室に机を一つ置かしてもらうことになっているとのこと。

お金の話は後回しにして、とりあえず４月に日本の外務省と東京のシンガポール大使館、大阪のシンガポール総領事館に飛んで行った。シンガポール側からは好意的な対応をしてもらったものの、外務省では、今から準備を始めて８月に事務所を開設したいというのは現実的ではないとのこと。そこをなんとかということで、４月半ばから７月初めまでの実質３か月間にわたるドタバタが始まった。シンガポール側の公的事務所の設置許可官庁が外務省だったために外交ルートを通じて申請する必要があり、日本の自治省、外務省を巻き込んでの話となったが、この間、主として日本側において色々な問題が生じた。

このような経緯はあったにしても、結果的には、シンガポール政府外務省に正式申請書が届いてからわずか１週間で設置許可が出るという異例の対応のおかげで、無事予定どおり８月に事務所を設置できることとなった。

赴任

シンガポール政府外務省に正式に事務所の設置許可申請書が届いたのは７月の１２日だったが、許可までに通常１か月以上はかかるとの話だったため、２人の子供の小学校の転校の話をどうするのか、夏休みに入る前に転校のあいさつをさせても良いのかなどと、個人的にも問題があった。

設置許可はまだ先の話、それに第二次世界大戦においてシンガポールを占領した日本軍の３個師団のうちの第五師団の本拠地が広島とのことで何か問題は生じないだろうか、などと考えていたところに、思いもかけない超スピードでの設置許可の連絡が入り、すっか

りあわててしまった。シンガポール側の好意的な対応に応えないといけないと思い、荷づくりも途中までやりかけで放っておいたのを２晩徹夜してとにかく送り出し、連絡を受けて３日目には準備のためにシンガポールに飛んで行った。５日間の滞在期間中に、それまで終始好意的に協力いただいたシンガポールの日本大使館の担当官等への挨拶、ビザの申請、東京銀行の現地支店での事務所口座等の開設、日本人学校への転校手続き、電話等の申し込み、アパート探しなどを片付けて、また広島へとんぼ返り。

できれば、シンガポールの独立記念日である８月９日までに着任したいと思ったため、広島では１週間で挨拶まわりを済ませて、８月８日には家族とともにシンガポールに着いた。シンガポールの独立記念日までに着任したいというのは当初特に深く考えてのことではなかったが、その後地元の人たちと話をする中で、独立記念日の前夜に来たというというだけで会話がスムーズに始まり、予期した以上に大きな効果があった。多民族の新興国家における独立記念日の持つ意味の大きさを、改めて感じさせられた。

テレホンカード

この年の５月には、事務所の共同設置主体である広島県、広島市、広島商工会議所の３者での事前調査団の一員として東南アジア各国を訪問していた。この調査団では、１週間で、香港、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポールを駆け足で回った。

この事前調査団の他のメンバーが帰国した後、準備のため一人でシンガポールに残っていた際に、その後のシンガポールの人々との幸せな付き合いを暗示させる出来事があった。街角の公衆電話で電話をかけようとしたのだが、シンガポールの公衆電話はテレホンカードかコインかのどちらか専用のものしかない。その時にはあいにく近くにはカード専用の電話しかなく、コインしか持っていない私がうろうろしていると、通りがかりの人がどうしたのかと声をかけてくれた。事情を説明するとカードを貸してくれるという。借りたカードで電話をしたがあいにく相手がいなかった。礼を言ってカードを返そうとすると、事情を理解した相手は、あなたが困るだろうから自分のカードをあげると言って立ち去った。カードにはまだ６００円分ほど残っていたのに。初めてのシンガポールに一人で残り不安でいた私にとって、思いもかけない幸せな経験であったし、それからのシンガポールの人たちとの付き合い方に大きな影響を与えた経験でもあった。

靴屋の話

ところで、シンガポール行きに手は上げたものの、シンガポールはもとより東南アジアについての私の知識は白紙に近かった。白い砂浜の海岸のヤシの木の下に木の葉で葺いた屋根の小屋、というイメージからさほど離れたものではなかった。

とはいっても、これは私だけの話ではないと思う。靴を買いにいき、店の主人に、シンガポールで働くことになったので靴選びに何か気をつけることがあるだろうかと聞いてみると、大真面目な顔で、暑い国だから合成底の靴では溶けてしまうので本革の底の靴にしなければという。今では、言うほうも言うほうなら信じるほうも信じるほうだと思うが、当時の私も何も知らないので、素直に信じて生まれて初めて革底の靴を買った。

シンガポールに行った後、地元の人たちに、日本ではいかにシンガポールのことが知られていないかを説明するために時々この話を紹介していたが、いつも大受けだった。

出入国管理局での失敗

最初のうちは特に言葉での失敗が数多くあるが、印象に残っているのは出入国管理局へビザの申請にいった時のことだ。受付まで行った時にパスポートの原本を持ってくるのを忘れたことに気が付き、コピーだけで良いかどうかとたずねたら、郵送扱いにすれば良いではないかとのことで郵便物の仕訳室へ行くように指示された。もっとも、その時はそれが聞き取れずに、ただ指示された番号の部屋に行ったのだが、当然ながらそこには郵便物の仕訳けをしているおばさんが何人かいるだけ。相手の言うことは分からず、こちらの英語も通じない。なぜこの部屋に来るように言われたのか分からないまま１０分近くすったもんだした挙げ句に、やっと間違っていることに気が付いて元の受付に戻った次第。シンガポールでは若い世代は全員英語教育なので英語については問題ないが、年配の人の中には中国語教育のためあまり英語を話さない人たちもいる。ただし、社会全体が英語中心の社会となっているために、英語ができないと就職においても困難があるようだ。今回は、こちらの英語が慣れていないこともあって、話をこじらせてしまった。

ないないづくしのスタート

さしたる準備もなく、とりあえず知事からの話を凌ごうとしての事務所開設の話であったために、他県の事務所に比べて一桁少ない予算しか手当てされておらず、ないないずくしのスタートとなった。事務所長候補として発令されて初めてそれを知った時には愕然としたがどうしようもない。事務所活動に使う車はなし。他の自治体事務所の全てで雇用している地元のアシスタントもなし。事務所とは名ばかりで、中心部から１３km離れた郊外の住宅団地に併設されている工業団地にある工場に間借り。さすがにそんなに不便なところで車もなしには仕事にならないと、レンタカーを借りる経費だけは追加で認めてもらい、前途不安な中でのスタートとなった。

机の購入

アシスタントさんがいないので、全て自分自身で手探りでやらなければならない。おまけに、お金もないので、机一つ買うのにもショールームで高級なものを買う訳にはいかない。仕方がないので、地元で家具を作っている工場を紹介してもらい、出掛けて行き事情を説明して安くわけてもらうことにした。こんな日本人はめずらしいらしく、この工場の人は後で電話を掛けてきて、何か困ったことがあったら何でも相談に乗ってあげるからと言ってくれた。この例に限らず、いつもお金に困っていたがために地元の人の好意に頼らざるをえなかったが、その分、人々の暖かさを早く理解することができたと思う。もっとも、それは怪我の功名であり、そんないいかげんな状況で事務所をスタートさせるのが良い訳ではないが。

シンガポール製造業者協会チン事務局長

へっぴり腰での事務所スタートではあったものの、やらなければならないことは山積していた。１１月には、知事以下１５０人もの人々が広島から来てひろしまフェアをやることになっていたし、経済交流の促進を主目的として設立された事務所として、何ができる

のか模索もしなければならない。

そんな中で印象に残っているのが、シンガポール製造業者協会（ＳＭＡ）を初めて訪問した時のことだ。シンガポールは多民族国家のため、商工会議所も、中華総商会、マレー商業会議所、インド商業会議所などとそれぞれに分かれており、パートナーの選び方が難しい。幸い製造業の場合には、全体を統一したシンガポール製造業協会があるので、とりあえずこことコンタクトを取ることにした。何しろ何にも分からない状況なので、この協会と付き合うのならやはり会員になっていたほうが良いのではないかと助言してくれた人の話を信じて、とりあえず入会申し込み書を準備して、事務局長に面会を申し込んで会いにいった。

この事務局長は、多国籍企業であるシェル石油を定年退職した後請われて事務局長に就任された方であり、見るからに好人物だった。私の話を聞いてくれた後で、会員になると経費的に大変だから無理をしなくても良い、会員にならなくても協会としても協力するし個人的にも協力してあげる、幸い今夜日系企業のレセプションに招待されているので、一緒に連れていってあげて色々な人に紹介してあげよう、とのこと。その夜は事務局長の車に同乗させてもらってレセプション会場へ。幅広い人脈で、多くの人を紹介していただいた。その後も色々なレセプションで顔を合わせる機会が多くあり、退屈だからと二人で会場を抜け出してコーヒーショップへ１時間ほど雑談に行ったなど、シンガポール滞在中を通してお付き合いいただいた。

夫婦でのレセプション初参加

このような企業関係のレセプションは通常一人で行くことが多いが、大使館関係のレセプションや地元の人に招待される場合などは、夫婦で行くことになる。レセプション自体に馴染みがなく、ましてや夫婦でパーティーになど縁のなかった我が家では、初めて夫婦でレセプションへ行く際にはそれなりに大騒ぎとなった。

まず妻が、着ていく服がない、アクセサリーがないと騒ぎだし、仕方なく買物に。日本では買ったことのなかった真珠のネックレスをシンガポールで買うはめになった。当日は夫婦してドキドキしながら会場へ。最初から最後まで緊張して、挨拶をしたり話をしたりするのに夢中で、ほとんど食物に手をだす余裕がなく、妻などは結局食べたのはかまぼこ一枚で、帰りに二人でマクドナルドのハンバーガーを食べて帰ったという次第。これも回を重ねるにしたがってだんだんと要領が良くなり、まず初めにおいしそうなものをお腹に詰め込み、その後でゆっくり話をして回るということができるようになってきた。

地方自治体の海外事務所の役割

このようにして事務所活動はよちよち歩きを始めたが、事務所体制の不備と合わせて私を悩ませたのが、一体地方自治体の海外事務所は何をすれば良いのかという基本的な問いかけだった。もちろん、当面は挨拶まわりやひろしまフェアの準備で忙しいにしても、その後をどうするのかが問題だった。他の自治体事務所に比べてあまりにお粗末な状況の改善を要求するにしても、その必要性をどう説得していくのか。

その時点までに東南アジアだけでもすでに８つの地方自治体の事務所又はジェトロへの駐在員が活動していたが、それらの活動内容は、レポート作成が主であるもの、来客対

応が主であるもの、交流事業を手掛けているものなどまちまちであり、こうすべきだというはっきりとしたものは固まっていないように感じられた。

その後の３年近くの活動を通じて私なりに考え努力したのは、下記の点だった。

① 独自企画の交流事業を含む、広島という統一的な名の下での継続的な交流活動

継続と責任の原則の下での交流事業の継続を通じて信用の蓄積が図られ、より深い相互利益を考えた交流事業が実現できる。

② 広島側の計画に対する現地側からの意見表明、助言を通じての広島への啓発

広島側からの依頼、計画に対してそのまま応えるだけでは、単なる請負、旅行業者と変わらないことになる。その考え方はおかしいとかこうしたらどうかといった現場の事情を踏まえた議論をしていくことが、地域独自の事務所を持つ意味である。それによってより良い事業を組み立てていくことができる。

③ 経済と文化の両分野にまたがる息の長い交流事業の実現

経済交流は相互の信頼関係がなければ促進できないし、文化交流も経済関係などお互いの利益の下に進めていかないと長続きしない。ところが、日本側の対応について言えば、事業の実施母体が分かれていることが多い関係上、別々のものとして企画されることが多い。このため、現地事務所としてそれを結びつける事業を考える意味がある。

金は出さないが汗をかく

国際交流事業は、こちらが一方的にお金を出すのであれば相手も我慢してこちらの言うことを聞いてくれて簡単だが、それでは金の切れ目が縁の切れ目となってしまう。このため広島事務所では、招待事業も行うとともに、独自事業として金を出さない事業も企画し提案していった。これらは主に日本語を勉強している学生を対象とした広島への日本理解ツアーの派遣や各種交流事業であるが、相手の自主的な力を尊重するということで、広島としては金は出さないが中身の充実したものとするために汗をかくという言い方をしていった。すなわち、例えば企業訪問にしても単に概要説明を聞いて工場を見るだけでなく社員との意見交換会をセットするとか、交流事業では事前に小グループに分けて手紙の交換をアレンジするとか、我々のできることを一生懸命にやるということを説明していったし、実際にも、双方がメリットを感じることができ、継続していくことによって各年の反省の下により良いものにしていけるように手を抜かずに努力していった。

このような背景があったために、シンガポールの最後の時期に、日本の新聞社の駐在員の方から、シンガポール広島事務所は地元で大変良い評価を得ている、日本の企業などが往々にして金さえだせば良いとか、何か事業をすれば良いというように見える中で、広島事務所は最後までお互いのことを考えて一生懸命にやってくれるという評価を何度か聞いた、と言っていただいたときには、涙が出るほど嬉しかった。

見積もり取りを断る

とはいっても、最初の頃は早く実績を上げたいし、将来のために安易に妥協はしたくないし、ということで悩みがあった。特に企業のサポートという点では難しい面がある。ある広島企業が取引先開拓のためにシンガポールに来た際、希望の製品を製造している地元

企業を探し、訪問にも同行した。広島企業、地元企業の双方に対して、当事務所は紹介をするだけであり取引の内容には責任は持てないし、今後は直接やりとりをしてほしいと依頼したにもかかわらず、しばらくしてこの広島企業の方から、次はこの内容で見積もりを取ってほしいとの依頼があった。実績はあげたかったものの、個別企業に対してそこまでのことをしていると、結局いくつかの特定の企業の世話をするだけに終わってしまう、いくら経済中心とは言っても、視察団等を中心に考えるべきであり、個別企業の事業活動にまで立ち入るべきではないとの判断から、結局この依頼を断った。まだ実績もなく、仕事自体が立ち上がっていない段階からすればかなり勇気のいることだったが、結果的にみて正しい判断だったと思う。

看板をかかげることの意味

当初の広島サイドの、とりあえず人を一人送り込んでおいて様子を見るとともにお茶を濁すという姿勢とは関わりなく、一旦広島事務所としての看板をかかげた以上、どんなに環境が整備されていなくても、広島という名の下に持ち込まれる話については逃げることはできない。シンガポールで広島事務所の名前が広がるにつれ、持ち込まれる案件は増えてきた。

基本的にはうまく展開していったが、その中では常に不安もあった。すなわち、うまくいっている間は、広島事務所の信用は蓄積されていき、それが次の事業においても、より良い効果となって表れるいわば良循環が生まれるが、もし何か問題を起こせば、一気にそれを破壊してしまう。このため、事務所ではアシスタントさんと共に、信用の蓄積には時間がかかるがそれを壊すのは一瞬ということを、常に自戒の言葉として話し合っていた。

経費要求と「バンコクへでも移すか」

このように色々と悩みながらも、経費要求だけはしていた。仕事の急増の中でアシスタントさんがいなければ仕事にならないこと、中心部から遠く離れた郊外の工業団地内の工場の間借りでは、会う人毎に、なぜそんな不便なところにいるのか、なぜ公的な事務所が民間企業の中にいるのか、この民間企業は広島県が所有しているのか、などと聞かれること、レンタカーの支払い額を考えれば独自に購入したほうが有利であることなどを根気強く訴えていった。

そんなある日、県のある中堅幹部が「シンガポール事務所がそんなに金が要るというのならバンコクにでも移すか」と言ったとの話を聞き、しばらく怒りで寝られなかった。バンコクにある地方自治体事務所は、言葉や安全の問題もあり、日本語のできる地元の男性スタッフ、女性秘書、運転手の３名を雇っているという現実を知らない無責任な発言であったが、事務所をその程度にしか考えてないのかという点でショックが大きかった。

ひろしまフェアと花火

そんな事務所の内部事情とは別に、ひろしまフェアの準備は進められていったが、問題となったのは、花火の打ち上げだった。なぜそんな話になったのかは分からないが、ひろしまフェアの際にシンガポールで花火を打ち上げる計画だという連絡が広島側からあった。地元のシンガポール人と日本人に意見を聞いてみると、シンガポールでも独立記念日

など年２回ほどは花火を打ち上げており、特別めずらしいというほどではない、何のために花火を打ち上げるのかその趣旨が良く分からない、もし打ち上げるのなら相当の経費をかけて誰がなぜ打ち上げるのかを大々的に宣伝しないと意味がない、といった反応だった。このため、広島側にこの話を伝えるとともに、事務所としては、一瞬で終わってしまう花火よりも、もっと将来の交流につながるような例えば教育機関への寄付などを希望する旨意見を提出した。

結局、花火は実施する、教育機関への寄付については１００万円を措置するので事務所でその使い道を考えるようにとのことになった。花火については、関係諸官庁による最終的な実施許可が出たのが予定日の１週間前という綱渡りをしながらも実現したが、広報経費については結局手当てされず、地元の新聞にも取り上げられないという残念な結果となった。ただし、マーライオンのあるマリーナベイでの花火は十分に美しく、参加した人々には楽しんでいただけたものと思う。

シンガポールポリテクニック校への図書寄贈とその後の交流

思わぬことで教育機関に１００万円の寄贈ができることとなり、そのやり方が任されることとなった。

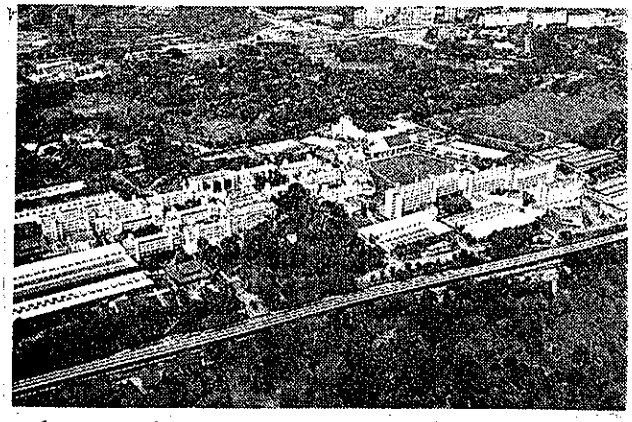
その際私が考えたのは、いかにしてその寄付を効果的なものにするかだった。すなわち、すでに十分日本語の本を持っているところに追加の寄付をしてもありがたみがないし、１００万円を小口に分けても効果が小さくなる。このため、当時シンガポール日本人学校で、文部省の新しい政策である「国際交流ダイレクター」の初代として活躍されていた徳永先生にご相談した。その結果、その年の７月に日本語の教育を始めたばかりというシンガポールポリテクニック校を紹介していただいた。シンガポールは人口３００万人に対して大学が２校しかなく、この国立高等専門学校であるポリテクニック校４校が、シンガポールの専門・技術教育の中心的な役割を担っている。シンガポールポリテクニック校はその内の最大のもので、社会人のパートタイムの学生を含めて学生総数１万８千人というマンモス校である。

その年の７月に日本語教育を選択科目として開始したといっても、この時点では専任講師２名、日本語図書にいたっては辞書数冊という状況だった。将来の交流可能性から考えても、広島からの中小企業は、シンガポールではエリート扱いされている大学卒業者の採用には困難があるだろうし、ポリテクニック校との交流には色々な可能性があると考え、この一校に絞って寄贈することにした。

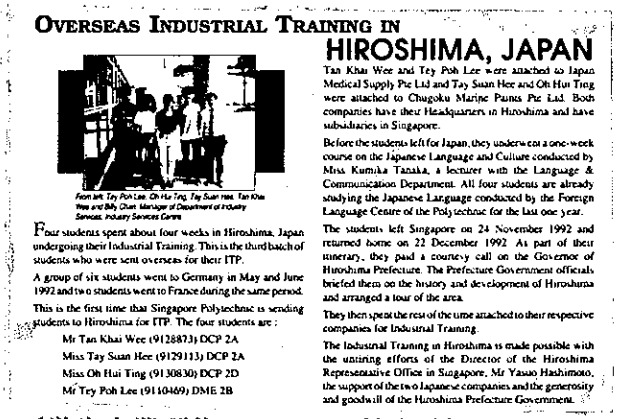
２年半後、私がシンガポールを離れる際には、このシンガポールポリテクニック校は、日本語を学ぶ学生が千人以上と、人数だけで言うとシンガポール最大の日本語教育機関に成長していた。図書寄贈を契機としてスタートした広島との交流事業も、その後、広島大学の日本語教育学科卒業生を講師として紹介、同校でのイベントでの広島紹介コーナーの設置、同校学生が在学中に義務付けられている企業研修のうち初めての海外企業研修の広島受け入れ、広島情報専門学校との協力協定締結、学校間の学生の相互訪問事業、同校で日本語を勉強している学生の日本理解ツアーの広島受け入れと幅広く大きく広がった。

特に、学生の海外企業研修については、初年度は４人を１か月、２年目は１０人を１か月半、広島企業及び広島情報専門学校の協力で受け入れることができ、その協力に対して

当時のリムブーンヘン上級国務相を通じて同校から記念品を受けるなど、シンガポールにおいて高い評価を受けている。



〔シンガポールポリテクニック校全景〕



OVERSEAS INDUSTRIAL TRAINING IN

HIROSHIMA, JAPAN

Four students spent about four weeks in Hiroshima, Japan undergoing their Industrial Training. This is the third batch of students who were sent overseas for their ITP.

A group of six students went to Germany in May and June 1992 and two students went to France during the same period.

This is the first time that Singapore Polytechnic is sending students to Hiroshima for ITP. The four students are :

Mr Tan Khai Wee (9128873) DCP 2A
Miss Tay Suan Hee (9129113) DCP 2A
Miss Oh Hui Ting (9130830) DCP 2D
Mr Tey Poh Lee (9140469) DME 2B

Tan Khai Wee and Tey Poh Lee were attached to Japan Medical Supply Pte Ltd and Tay Suan Hee and Oh Hui Ting were attached to Chugoku Marine Paints Pte Ltd. Both companies have their Headquarters in Hiroshima and have subsidiaries in Singapore.

Before the students left for Japan, they underwent a one-week course on the Japanese Language and Culture conducted by Miss Kumiko Tanaka, a lecturer with the Language & Communication Department. All four students are already studying the Japanese Language conducted by the Foreign Language Centre of the Polytechnic for the last one year.

The students left Singapore on 24 November 1992 and returned home on 22 December 1992. As part of their itinerary, they paid a courtesy call on the Governor of Hiroshima Prefecture. The Prefecture Government officials briefed them on the history and development of Hiroshima and arranged a tour of the area.

They then spent the rest of the time attached to their respective companies for Industrial Training.

The Industrial Training in Hiroshima is made possible with the untiring efforts of the Director of the Hiroshima Representative Office in Singapore, Mr Yasuo Hashimoto, the support of the two Japanese companies and the generosity and goodwill of the Hiroshima Prefecture Government.

〔学生企業研修についての校内誌〕

事務所のアシスタントの雇用

私が引き継いだ事務所の初年度予算には前述のようにアシスタントの雇用経費は計上されてなかったので、日本を出る前にひろしまフェアのための追加の予算要求の際に、２か月分のアルバイトの雇用経費をもぐりこませておいた。

着任以来１か月、予想外の業務量に、とりあえずアルバイトを雇用することとして、人材派遣会社に相談した。当方の事情を聞いた会社側は、そのアルバイト予算では経費的にみてベテランのスタッフをひろしまフェアまで継続的に雇用することはできない。最初の１週間だけファイル管理など仕事の段取りを付けるためにベテランを雇用し、その後は電話番の若い子を雇用したらどうか、ベテラン１人と若い子を２人連れていくから面接してみてくれ、とのことだった。

面接当日、３０歳前後のベテラン１人と、２０歳前後の２人が来た。実際に３人に会ってみると、若い子はいかにも頼りない。事務所で雑談して時間をつぶすには良いかもしれないが、実際にやるべきことは山積しており、しかも当方は右も左も分からない状態。結局、人材派遣会社には、単価が高いためにひろしまフェア前に予算が尽きてしまっても良いからベテランの方を継続して派遣してくれと依頼した。この判断をさせた一つの理由は、面接の際のこのベテランの女性の質問にあった。彼女はまず最初に私に対して、「私は産業関係のことを知らないがそれでも良いのだろうか？」と聞いてきた。私はこの質問に感動して彼女に継続的に来てほしいと思うようになった。仕事をするのに大切なことは、自分が何を知っていて何を知らないかを知ることだと思うし、自分の仕事に対する責任感故の質問だと感じたからだ。

アシスタントの雇用については、この後も紆余曲折があったが、アシスタントなしでは事務所活動が立ちゆかないことを根気強く説得していった結果、最終的には翌年の１月に正式雇用にこぎつけ、この時の彼女に現在にいたるまで継続的に働いてもらえることとなった。

海外事務所におけるアシスタントの役割

地方自治体の海外事務所におけるアシスタントの役割は、当然ながら事務所の状況によ

って異なる。ジェトロの事務所に駐在している駐在員の場合は、経理等の内部管理事務は基本的にジェトロの方でやってくれるし、シンガポールの他の独立事務所はいずれも日本人２人体制であるので、次長の方が主に内部管理事務を担当している。このような場合には、地元スタッフの仕事はどちらかというと秘書的業務が多くなるようだ。

広島事務所の場合は、何しろ全部で二人しかいないので、アシスタントにかかる負担は他の事務所に比べてはるかに大きい。経理、庶務などの内部管理業務一切はもちろん、資料整理などの調査研究業務、対外折衝・調整業務、来客対応から雑用にいたるまで、私が外に出ていることが多いだけに、幅広く何でもこなしてもらう必要があった。有能である必要があり、同時に雑用も嫌がらずにやってもらう必要があるという点に、人材確保上の難しさがある。

また、アシスタントは事務所の顔であり、その電話応対、来客対応が事務所の印象を決めていく。他の事務所の中には、「あんた誰」というような電話応対もある中で、当事務所の場合、私の留守中に電話を掛けてきた人が後でわざわざ、「シンガポールに来てあんなに良い電話の応対を受けたのは初めてだ。」と言っていただくほど、地元側にも日本人側にも極めて高い評価を受けることができた。いろんな面で、人の大切さを感じさせられる機会が多かった。

シンガポール政府外務省政務次官への知事表敬訪問

８月に着任して以来息つくまもなく１１月のひろしまフェアを迎えた。知事以下１５０人が広島から来星しての大きな事業だったが、印象に残っているのは、知事らＶＩＰのヤティマンユソフ外務政務次官への表敬訪問の際のやりとりだ。

席上、ヤティマンユソフ氏の「広島県は瀬戸内海の海洋汚染防止問題で技術の蓄積があるだろうから、ぜひその点でわが国の海洋汚染問題にも協力してほしい。」との発言に対して、知事が「何でもお手伝いしてさしあげましょう。四川省やタイからも研修生を招待して協力していますよ。」と応じた際、すかさず同氏が、「わが国は、下水道普及率が９９％であり、この点ではお役に立てる点があるかも知れませんから、お互い協力してやっていきましょう。」と申し入れた。

私は、このやりとりに、シンガポールのオープンさと自負を感じた。一方的に何かを頼むのではなく、お互いに協力して良い関係を築いていこうという、良い意味でのプライドと意欲は、シンガポール滞在中を通じて感じたものだった。

ちなみに、このヤティマンユソフ氏はセバタクローの選手であったスポーツマンで、当事務所からの季節の挨拶状にも常に返事をいただき、私の離星の際にもレターを書いていただくなど、気配りの人だった。

シンガポール政府外務省高官との話

シンガポール政府外務省というともう一人忘れられない人がいる。日本担当部門の実務責任者だった人だが、ある日この人から電話がかかってきて少し話しに来ないかという。

事務所の開設許可の件以来お世話になっていたので早速飛んで行くと、「先日リークアンユー氏（３１年間に亘ってシンガポールの首相を務めた建国の祖）が、先日日本の新聞のインタビューで、『日本からシンガポールには年間１００万人もの人が訪れるが、観光

客はセントーサ島などの観光名所とオーチャードのショッピングエリアしか知らないし、日本のビジネスマンもシティのオフィスとジュロンなどの工場しか知らない。シンガポールから日本へ行くのも、その多くはビジネスマンで東京と大阪しか知らない。これではいつまでたってもお互いの国民が本当に双方を理解することにはならないのではないか。』と述べた。我々としては、東京、大阪以外の地域とも何らかのより深い交流ができるのではないかと期待している。あなたも、それについて考えてみてくれないか。」とのことだった。

このリークアンユー氏の発言は、氏が日本軍による占領期間中の中国系住民の大量虐殺事件の際に辛うじて難を逃れ、その経験が自分の身は自分で守るという独立国家への道を選ばせたと言われているだけに、普通の人々の相互理解の重要性を訴えるという点で共感を呼ぶものだった。

以後、広島事務所の活動は、この話を踏まえて展開されることになる。

アジア各国の日本人マネージャーの地元スタッフ評価アンケート

もう一つ、シンガポールにおける私の活動方向について考えさせられた事例が、地元の代表的な新聞であるストレーツタイムズに掲載された、アジア各国の日系企業日本人マネージャーによる現地従業員評価についてのアンケート調査結果の記事をめぐる地元の人との会話である。

この記事の内容は、アンケートの結果日本人マネージャーに評価の高かったのは香港が１位でシンガポールは３位だったこと、シンガポールの日本人マネージャーによる地元従業員評価は、無愛想でとっつきにくいというものだったと思う。特に地元従業員評価については私のそれまでのシンガポールの人々との付き合いの経験とは異なるものであったので、地元の人との雑談の中でこの記事を話題にしてみた。その時の相手の話は、「３年から５年の腰掛けで来て、いつも本社の方ばかり向いていて、日本人グループの中だけで食事にいったり酒を飲みにいったりする、そんな相手になぜこちらからだけ一方的にニコニコ愛想良くしていけるのか。」というものだった。

私の場合、事務所は日本人一人だけ、金もなく地元の人には頼むことばかり、郊外の工業団地なので食事は近くの屋台風の食堂という世界だったのであまり意識しなかったけれども、そう言われてみれば思い当る点もあった。

もちろん日本人みんながそうだという訳ではなく、人によりまちまちで、やはり「相手の反応は自分の心の鏡」というのが、シンガポール生活を通じての実感だった。

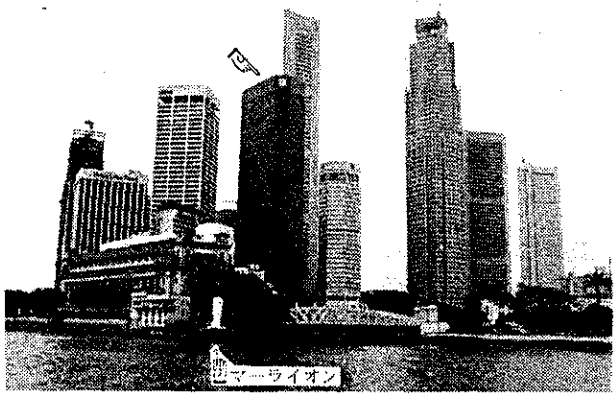
事務所移転

色々な経緯はあったものの、事務所開設後８か月にして独立の事務所が持てることとなった。会う人毎に、なぜそんな不便な所にいるのか、なぜ民間企業のそれも工場に間借りしているのかと聞かれ続けていただけに、これでやっと一人前の事務所として認めてもらえるというううれしさがあったと同時に、それにふさわしい業務内容に充実していかなければならないという責任も感じた。

事務所の内装については、他の自治体事務所が日系の会社を使っているのに対して、経費的な問題もあり、地元の業者に依頼することとした。地元業者から見積もりを取り予算

要求をしたのだが、経費総額については適当と認められたものの、県と他の共同設置主体との間の経費負担の押し付け合いのあおりで、実際にはその８割弱の経費しか手当てされなかった。見積もりを取った地元の業者に相談したところそんな額ではとてもできないとのこと。結局、新しく独立したばかりの個人業者に、初仕事だからということで特別に安く引き受けてもらうように頼み込んだ。

折からの円安の影響でシンガポールドルでの送金額が目減りしたこともあり、使える経費は極端に制約されていた。応接のソファーは頼めたものの応接テーブルを作る経費がなく、内装をやってくれた大工さんが呆れて、仕方がないからただでやってやろうということになったり、室内に置く模造植木の植木鉢カバーを、お金がないので安物の白いプラスチックのものでよいからと言ったら、請負業者さんが、それではせっかくここまで力を入れてきた雰囲気づくりが台無しになるので、自分が差額を負担してやるから、まわりにマッチする真鍮のものにしようと言ってくれたりと、日本でもあまりないような浪花節の世界で事は運んでいった。結果的には、かなり制約された予算にもかかわらず仕上げはすばらしく、地元と広島からのお客さんの双方から、機能的でかつ居心地の良い事務所だとの評価をいただけた。家具等の内装をやってくれた大工さんは細部にまで気配りの行き届いた仕事をしてくれて、地元の技術レベルについての私の不安を一掃してくれた。この人とはその後も一緒に食事にいったりと、帰るまで付き合いが続いた。



〔シンガポール広島事務所入居ビル〕

〔シンガポール広島事務所〕

事務所用車の購入

事務所の移転と合わせて、事務所用車の購入も認めてもらった。それまで使っていたレンタカーの料金が高く、長期的にみれば購入した方が有利だということによる。

ところが、シンガポールではマツダのカペラが８００万円もする。これは、２００％近い輸入税と、車の総量を規制するために導入されている購入権の入札システムによる。購入権の入札は毎月行なわれるが、月によって落札額は大きく変動する。予算要求時には１００万円だったものが、購入時には１５０万円程度になっており、円安の進行と合わせて、ここでも予算不足となってしまった。ちなみに、この購入権はその後４００万円にまで上がっていった。結局ここでも、シンガポールのマツダ車販売会社の社長に泣き付いて値引きをしてもらい、何とか予定どおり購入することができた。

為替変動に一喜一憂

事務所の移転と事務所用自動車の購入をしたこの年は、当初予算で予定したよりも円安になってしまい、数十万円の為替差損が出てしまった。家賃、現地人件費、電話代などの経常的固定的経費がほとんどを占める事務所としては、その差損のカバーに苦労した。

逆に３年目には円高が進んだおかげで経費的には楽になったが、赴任時にアパートの保証金などで必要な１万ドルのために用意した８０万円が、帰国の際には為替レートの関係で６７万円に目減りしてしまったなど、個人としての為替差損もこうむった。

広島からの来客対応

このようにいつもお金の心配をしており、当初は、衛星通信によりシンガポールで同時印刷されている日経や朝日新聞の購読料の月１万円が捻出できない状況だったが、お金がないというのは、地元の人の情けが感じられるといういささか負け惜しみの感のあるメリットの他にも現実的なメリットがあった。とにかくお金がなくて、広島への電話もかけなおしてもらう状況であったために、広島からの来客に対して食事の提供などの経費支出を一切しないという良い慣習が確立できた。事務所には、行政、経済団体、民間企業等から色々な方が訪問されるが、相手が誰であれ無い袖は振れないので食事等の対応はしないということで通したが、これは海外事務所としては比較的まれな例ではないかと思う。

観光案内、買物の付き合いについても、一人事務所ゆえ手が回らず、全て勘弁していただいた。このような話は、一つ例外をつくると拡大してしまうものであり、そのかわりに公式行事のアレンジは一生懸命にやるからということでご理解をお願いした。

このような体制づくりが、その後の事務所の業務の急拡大期に大いに助けとなった。

広島への現場の事情説明

このように概ね順調に進んでいった事務所活動だったけれども、もちろん何の問題もなかったわけではない。海外における事業実施については、現地の事情を尊重することが大切であるのは言うまでもないが、それでも「自分の金で出掛けていって自分の金で事業をするのだから広島の流儀でやってもいいではないか。」といった発言があったりして、間に立って調整をする現場の事務所を悩ませることもあった。

こういった場合には、直接広島へ電話をして現場の事情を説明せざるを得ず、その電話代が事務所の経費を圧迫するということにもなってしまう。

企業の中には海外に事務所を開設しても日本人スタッフを派遣せず地元のマネージャーに任せている例もあるが、そんなマネージャーの一人が私に、「自分の仕事の８割は本社への現地の事情の説明だ。」とこぼすのを共感をもって聞いた。

青年交流～祭りとコミュニケーション

事務所設置の最初の頃は特に、広島でも事務所のことがあまり知られておらず、大使館など他の機関へ訪問等のアレンジ依頼がなされることもあったが、結局は事務所の方へ回ってきた。広島県内のある市からの青年交流事業の依頼もそのような経緯をたどった例であり、このために事務所の方へ話が来た時には予定日の１週間前となっていた。

その依頼の内容は、その市から６人の２０代の青年を送るから、シンガポールの２０代

の青年６人との交流会をアレンジしてほしいというものだった。時間の無い中であわてたが、シンガポール青年協会に協力してもらって交流会をアレンジした。当日は、シンガポール側の出席者がいずれもコミュニティセンターで活動している人たちばかりだったこともあり、ゲームや歌に盛り上がったが、なにしろ言葉が通じないので交流に限界を感じた。やはり相互信頼を深め継続的な関係を築いていくためには、言葉による相互理解が大切だと感じた。

広島からの来客にはあまり英語能力が期待できないため、この後の交流事業に当たっては、シンガポールで日本語を勉強している学生を中心に考えることにしていった。高校や大学で日本語を勉強している学生との交流事業をセットし、事前に手紙のやりとりなどをした上で、シンガポール訪問時に小グループに分かれて日本語で意見交換をするという広島事務所独自の交流の進め方は、この反省から生まれた。日本語を学んでいるシンガポールの学生側にも、実際に日本人と話をするというメリットがあるという点に着目したアイデアである。

〔広島とシンガポールの青年の交流会〕

<リムブーンハン通産担当上級国務相からの記念品授与>

<ＳＰ校での業務協力覚書の調印式>

Ⅲ　国際交流について

双方向で継続的な交流

シンガポールで数多くの交流事業に関わる中で、私なりの国際交流についてのイメージが生まれてきた。すなわち、「儀礼的、覗き見・体験的な国際交流や、一方的、恩恵的な国際協力から、対等な関係で双方が学び会い、双方にメリットがある継続的な交流をめざし実現していく時代」というものだ。

儀礼的、覗き見・体験的的な国際交流

その理由は色々あるが、一つのきっかけはシンガポール日本人学校の校長先生の話だった。レセプションで一緒になり色々と話しをしている中で、校長先生が、「青年の翼など色々な交流団が日本人学校にも毎年数多く訪れるが、多忙な中で時間を割いて対応しても、話をしている途中にも次の観光地はどこかとか土産は何を買おうかとかといった雑談が絶えない。人を海外に連れてくれば国際理解や交流ができるというものではない。」と言われた。

幸い広島関係の話ではなかったものの、色々と考えさせられた。海外に行くということ自体が悪い訳ではなく、常に何らかの発見、刺激があるだろうが、交流事業として考える場合、普通の観光旅行に終わらせないための努力が必要ではないかと思う。

単にバスの中からよその国をみて回るだけであるならば、いわゆるサファリパークツアーと異ならないし、地元の人と何らかの交流事業をしてもその場限りのもので終われば、単に珍しい体験をしたということで終わってしまう。お金持ちの日本人が大金を使って訪問してきて、色々と自分勝手な注文を付けて「交流事業」なるものをやり、自己満足して帰ってそれっきり、という評価にもなりかねない。現に、事前には色々と注文をつけていても、済んでしまうと礼状も出さないという話も聞いた。

普通の旅行でもそうだろうが、そのような交流の機会が自分の普段の生活に何を残すか、どんな変化をもたらすのかが重要ではないかと思う。機会は、それをその後に生かさなければ、単なる機会に終わってしまう。もちろん、交流団で訪問される方の多くは、その訪問期間中に色々なことを感じ考えられているし、帰国後に訪問によって感じられたことなどについて個人的に手紙をいただくことも少なからずあったが、ここで言っているのは、交流事業一般としてそのやり方に工夫の余地が大きいのではないかということだ。

継続と責任

そこでのキーワードは、継続と責任だと思う。

自分が海外まではるばる出掛けていくのだから地元の人々が対応してくれるのは当然、というのではなく、どのようにして双方にメリットのある継続的な関係が作っていけるのかを考える必要がある。ここに、地方自治体が独自の事務所をもつ意味があると思う。すなわち、すべての訪問団が独自に継続的な交流事業を考えられるわけではなく、「広島」という名前の下に、地域対地域といった継続的な交流のあり方を考えていくべきではないかと思うし、そのように努力してきた。

例えば、シンガポール大学の日本研究学科についていえば、同学科の学生の日本理解

ツアーを広島で受け入れ、ホームステイ、企業訪問、学生交流などのアレンジで協力するし、広島からの訪問団がシンガポールを訪問する際には、同学科の日本語を話せる学生との交流事業を行なう。この交流事業についても、単に学校を訪問して自己紹介と趣味の紹介をするだけではなく、大学で日本語の手紙の書き方を指導するタイミングに合わせて、訪問予定の広島側のメンバーと事前に手紙の交換をし、当日もあらかじめ決めておいた小グループに分かれて何時間かの話し合いを行なう、といったことをしていた。その中には、大学の休み期間中に、４０名近くの学生にまる１日大学に出てきてもらっての交流会というのもあった。

〔広島からの学生への概況説明〕

〔シンガポールの学生への事前研修〕

一方的、恩恵的な国際協力

シンガポールの外務政務次官への表敬訪問の項にも書いたが、一方的、恩恵的な考えでは、国際協力はなりたたないと感じた。特に地域独自の活動の場合にその感が強い。

シンガポールはもはや発展途上国ではないが、いずれの国の場合も、そのリーダーの中には真剣に自国の将来を考えている人々が多く、それらの人々は幅広い情報と深い見識により世界を見回し、自国の将来にとって何が最も必要かを常に考えている。自国の将来に対する夢と自負とを持っている。

それらの人々が求めているのは、自国の将来に本当に必要なものを真剣に考え共に歩んでくれる長続きするパートナーである。金を出してもらえればいやな顔をするものはいないが、リーダーたちはもっと冷静にもっと厳しく現実を見つめている。相互の建設的な関係を作るためには、相互利益を説明したしっかりとした長期的な理念が問われている。

日本について言えば、今いくらかの金を持っているからといって、それによって自分自身が真剣に将来に向かっての変革をしていかなくても良いと考えれるほど、また一方的に他人の世話をしてあげるなどと考えられるほど満足すべき状況にはないと思う。もしこのように考えるならば、相手からの評価を勝ち取ることなく過去培ってきた資源を食い潰してしまい、変革のチャンスを失ってしまう。日本の社会、組織の閉鎖性を変革することなく日本の将来はないし、そのためのきっかけと考えることこそが国際交流のメリットではないかと思う。

対等な関係で双方が学び合い、双方にメリットがある継続的な交流

国際交流は大人の関係であり、それぞれに張りを持ってそれぞれの未来のために努力しているもの同士が互いに刺激し合い、学び合うものではないかと思う。今の自分を明日の自分へ変えていくことの必要性とその困難さを感じていて初めて、その具体的な機会としての国際交流の意義、価値が感じられるのではないか。

このような交流は、継続性に基づく信頼の上に成り立つものであり、この点において地域独自の交流の意味があると思う。

国際交流の一般的効果

地域が国際交流を進めていく上での一般的な効果としては、序列意識の打破、常識の見直し、多様性許容力の習得、といったものがあると思う。

序列意識の打破というのは、隣の○○よりも少し上、少し下といった国内の横並び主義ではなく、世界に通用する技術、政策、体質づくりを図るきっかけにということである。上下左右をみて身の程を知るというのではなく、また、人よりも頭一つ抜け出るというのでもなく、身体一つ抜け出すぐらいの意欲で世界レベルに通用するものをめざしていくことが大切だと思うし、そのためのきっかけになればと思う。

常識の見直しというのは、普段と違う視点からの「閉鎖社会の常識、慣習」の見直しをする機会となるということである。教えることは学ぶことであり、「暗黙の了解、共通の常識」が通用しない相手に対して自らのシステム、考え方などを説明することを通じて、その不合理性、変革の必要性を発見することができるのではなかろうか。

多様性許容力の習得については、日本では普段あまり意識することがないが、世界では、民族、宗教、言語、生活習慣などが異なる人々が一つの社会に混住しているのがむしろ普通であり、その多様性の中の共存の知恵から学ぶことは多いと思う。それは融合ではなく共存であり、他人への尊重という社会の知恵だと思う。

広島へ受け入れる国際化

このように考える中で、広島の交流のあり方として、受け入れる国際交流も大切ではないかと思うようになった。

海外に人を派遣するというのは、確かに参加するものにとっては大変良い経験の機会であることは間違いないだろうが、その帰国後の地域への波及効果という点について考えれば、費用対効果という点では、外国の人々に広島に来てもらうというのもより多くの人々がそれらの人々と出会えるという点で意味があると思う。

自分たちが外国を訪れた時にだけ交流事業を期待するというのは一方的な話であり、現場で交流事業をアレンジする側から言えば、いかに相互利益を説明するかが問題となる。自分のことだけを考えている者に相手方が信頼して好意的な対応をしてくれる訳もなく、双方向というのは「交流事業」の基本となる。

国際交流の視点から見た広島の魅力は、大きすぎず小さすぎない規模であることから、ホームステイを通じて日本の人々の心が感じられると同時に企業訪問等を通じて日本の産業、経済についても理解できるという点だと思う。この点を地元側に説明していった結果、前述のシンガポール大学日本研究学科とシンガポールポリテクニック校から毎年２０

人２週間程度の日本理解ツアーの受け入れが始まった。

シンガポールの地元中小企業ミッションの広島派遣

経済分野についても同様に広島への派遣を考えたが、これについても、シンガポールの企業から見て広島に魅力がなければうまくいかない。

第１回目は、ジェトロの静岡県からの駐在員の企画に参加させてもらう形で、静岡県と広島県の共同事業ということで、両県の企業との交流団を派遣した。シンガポールでは、日本と同じく賃金コストの上昇、労働力不足から、技術高度化、海外展開が緊急の課題となっている。このため、シンガポール政府経済開発庁が、地元の中小企業のうち海外展開に意欲と能力のある企業を集めて組織したシンガポール国際化共同グループが、この交流団の母体となった。

その後、第１回目の団が性格的にやや漠然としており、一般的な交流以上には具体的な成果を説明しにくかったことへの反省から、次はより目的を絞って企画することとした。

次の団では、広島で視察できる技術であってシンガポールの中小企業の関心が高い技術として電磁波障害防止技術を取り上げ、これに興味のある企業を対象とした広島だけを目的地とした視察・交流団をシンガポール政府経済開発庁と共同で編成した。これについては、広島にシャープの音響事業本部があること、行政と民間企業が共同で設置している広島テクノプラザにこの試験装置が設置され公開されていること、広島の中小企業でこの技術に強い企業があることなどが要因となった。この団の派遣の打ち合せの際には、シンガポールの企業側に対して、私の方から、「日本の最先端の技術を目的にするのであれば東京や大阪の方が適当であり、広島のシャープにしても自社の最先端の技術を公開してくれる訳ではない。ただし、広島にはテクノプラザがありそれを中心に一定程度の勉強はしてもらえる。我々としては、むしろ企業交流のチャンスとして考えており、それに同意し納得してもらえるようであれば、参加してほしい」と説明し、理解を得た。

地方の経済交流事業としては、このような特定の技術や分野にテーマを絞った交流も一つのあり方ではないかと思う。

〔広島企業関係者のシンガポール企業訪問〕

〔シンガポール地元中小企業の広島派遣〕

Ⅲ　海外で暮らす

海外で暮らす

シンガポールには約２万～２万５千人以上の日本人が暮らしているといわれ、日本人にとって世界で最も住みやすい国の一つではないかと思うが、そうはいっても外国のこと故色々な問題は生じる。

男としての立場から言えば、日本にいる時よりもはるかに家庭のことに関わらざるをえなかった。例えば、風呂桶の栓が調子が悪いなどといった家の中のトラブルも全て英語での処理となるので出番が回ってくるし、日本人の医者がいない歯医者については、通訳として駆り出される。最初の頃は英語に慣れていないこともあり、スーパーに何かを買いにいってもどこにあるか分からず、店員さんに聞けば通じなくてよそへ案内されるなどという失敗を幾度となく繰り返した。

いずれにしても、海外では少々のトラブルは当たり前であり、結局のところみんなが健康で暮らせればそれで良しとせざるを得ない。その点では、私が急性胃炎で２度ほど点滴を受けたくらいですんだのは幸いだったと思う。

日本の２倍歳を取る

２年８か月弱の間で、広島から約１１０件１１００人もの視察団、交流団を受け入れたが、その多くは９月から１１月までの３か月に集中する。例年この時期には約５０件程度の訪問、交流事業をアレンジすることとなるが、常時数十件の案件が平行して動くことになり、アシスタントと二人だけでそれをこなさなければならないということと、はるばる広島からやってきて失敗という訳にはいかないということで、その緊張感にはかなりのものがあった。いくら一生懸命にやっていても、やはり直前まで見落としなどがあるもので、毎晩夜中に目が覚めては何件もの気づきが浮かんでくる。このため、枕元には常にメモ用紙を用意し、真っ暗な中で手探りでメモを書いていた。

シンガポールは、年平均の最高気温が３０度を超えるという、年中真夏日、熱帯夜の世界であり、それでなくても年中夜中に体中汗びっしょりで目が覚めるのに、その上にこれであり、最後には体力勝負の感となる。ある商社の方が、シンガポールでは日本の２倍歳をとると言われていたが、それ以上のものを実感した。

車の運転

車の運転については、東南アジアの通行方法は、フィリピン、ベトナムが右側通行である以外は基本的には日本と同じ左側通行であり、あまり違和感はない。

シンガポールでの車の総運転距離は、５万km以上となった。東西４２km、南北２３kmというこの国のサイズからすればよく走ったものだと思う。郊外の工場訪問などが多い上、道路が整備されており車の台数の総量規制のおかげで渋滞もないので、知らないうちに距離を走っている。

もっとも、これだけ車を使っていればトラブルと無縁ではなく、運転中の携帯電話の使用、駐車違反などで罰金も少なからず払ったし、駐車場に駐車中に他の車にぶつけられるなど、色々な経験をした。その度に右往左往しながら英語で始末をつけなければならず良

い経験をした、というのは悔しまぎれのやせ我慢で、人身事故をしないだけましと自分をなぐさめてげっそりしながら始末をつけていった。

それらのトラブルの中で熱帯ならではというのは、バッテリートラブルだった。年中真夏日という世界ではバッテリー液の蒸発が激しく、知らないうちに液がなくなっていてある日突然車が動かなくなる。これを２回も経験したというのは、情けないが事実である。

地元の人との付き合いと４つの正月

仕事の点では、シンガポールに行って以来名刺交換した１２００人もの人々の過半数が地元の人であったにもかかわらず、家族としての地元の人との付き合いはあまりなかった。これはもっぱら言葉の問題によるのだと思うけれども、それでもシンガポールの主要３民族である中国系、マレー系、インド系の正月には、それぞれの自宅に招待してもらう機会があった。

シンガポールには、正月が四つあると言われている。最初は暦の正月でありいわゆる日本の正月であるけれどもこれが一番盛り上がりに欠ける。休みとなるのも元日の１日だけであり極めて淡々と過ぎてしまう。

一番盛り上がるのはやはり人口の７８％を占める中国系の中国正月（旧暦の正月）であり、この国唯一の２連休の祝日となる。ほとんどの工場は１週間程度操業を止めてしまい、この正月にはほとんどの店が閉めてしまう。次に来るのは１か月に及ぶ断食、ラマダン明けのハリラヤプアサというイスラムの正月。そして最後はインド系の人々の光の神様のお祭り、ディーパバリ。いずれもその時期になると各民族の人々の家はクリスマスのようなネオンで飾りたてられ、団地の高層ビルの建物の民族構成が一目で分かる仕組みになっている。もちろん全員がネオンを飾るわけではないけれども、それぞれに目を楽しませてくれる。我が家でもこれにならいたいと思ったけれども、いつやるべきかに悩んでしまい、結局この電飾合戦には参加せずじまいだった。

〔シンガポール人の家庭での中国正月〕

〔インド人の家庭で長女ラープラタちゃんと〕

国際結婚

我が家が招待してもらったうち、マレー系の家族については、ご主人が日本人である国際結婚のケースだった。この方は小竹裕一さんといってシンガポール大学に中国語を勉強にやってきて、マレー系の女性と結婚し、現在は教育省の言語センターで日本語の先生を

しておられる。勁草書房から「シンガポールはおもしろい」と「変貌するシンガポール」の２冊の本も出しておられる文筆家でもある。

この外にも、奥様が中国系という尾道出身の方とは家族ぐるみでお付き合いをしていたし、シンガポール人のご主人と結婚されているという女性何人かとも仕事の上での付き合いがあった。国際結婚だからといって別に特別なことではないと思うが、子供の母国語の選択については悩む場合もある。両親の母国語のそれぞれが話せるといってもやはり自分自身の思考言語である母国語は決める必要があり、それは将来その子が過ごしていく世界をも決めていく。

なお、国際結婚以外のケースでも、現在はインドネシア在住で海外生活通算２０年という友人の家では、両親とも日本人であるにもかかわらず、子供たちは最初からインターナショナルスクールで学び、現在は息子さんがアメリカで、娘さん２人はイギリスで勉強している。また、シンガポールで近所だった日本人の家では、ご主人がスイスの会社のシンガポールでの責任者をしておられ、将来的にもシンガポールに住むということでアパートを買い母親も呼び寄せておられた。

このように、色々な環境で暮らしている日本人がおり、それぞれの思いを持ちながら暮らしておられることを知ることは、自分の生活を振り返ることにもなり、よい経験だったと思う。

海外で働く日本人

国際結婚をしている例などを含めて、海外で働く日本人の中には魅力的な人々も多い。特にそれを感じるのは、一人で工場又は事務所を任されて、時には百人以上の地元の人たちと仕事に取り組んでいる人たちの場合だった。

このような環境では、日本人グループの中で過ごすという訳にはいかず、地元の人たちの中に入っていかざるを得ない。そんな人たちは、自然に地元の人たちと接している。それは、「必死になって肩の力を抜く」あるいは「好きにならないとやっていけない」という状況かもしれないが、いずれにしても、そのような中でその国や人々を好きになったり嫌いになったりしながらも、結局のところはその国や人々の将来のことを考えて一生懸命にやっておられる。現地の事情に疎い本社を根気強く説得しながら、地元の人々と心を通わせようと悪条件下で奮闘されているこれらの人々の姿こそ、「国際化」のモデルではないかと感じた。

生徒数2500人の日本人学校

シンガポールには生徒数が世界一の日本人学校がある。小中学校合わせて２５００人。

小学校などは１学年９クラスの学年もある。あまりに生徒数が多すぎて、現在第２小学校を建設中である。学習内容は日本の学校と全く同じで、違うのは英会話の授業が週に低学年２時間、高学年３時間あることだけである。

もっとも、年に数回、体長２ｍくらいのブラックコブラや野生の猿が学校の裏庭に出てくるというのも、日本とは変わっている点にあげられるかもしれないが。

シンガポールに住む日本人の数は２万人から２万５千人といわれている。一般に、日本人学校の生徒数の約１０倍程度の日本人が住んでいるといわれるが、もちろんこれは一概

には言えない。シンガポールのように、治安、衛生、教育上の問題がなく日本人にとって住みやすい国については家族を同伴して赴任する例が多いが、生活条件が厳しい国の場合には単身赴任が多くなる。

シンガポールの日本人学校で驚いたことは、生徒の均質性である。かなりの場合、親は東京地区から来ていて、中堅サラリーマンで、母親はビザの関係で仕事を持っていなくて、と家庭環境が似通っているので仕方がないのかもしれないが、それが良いのかどうかについては考えさせられた。多様性の中での交流を通じて得るものがあるのではないかというのが、その疑問の理由だった。

学習塾

これだけ日本人の子供がいれば、そこには日本人のための日本人による日本人の学習塾が存在する。主なものだけでも６つはあり、恥ずかしながら我が家の子供もそのお世話になっていた。朝７時１５分にアパートからスクールバスで学校に行き、曜日によってはそのまま学校から塾へ、塾のスクールバスで行く。小学校の６年生ともなると家に帰ってくるのは、週に４日は夜の８時。早く帰ってくる日も近所の日本人と遊ぶというのでは、英語が話せるようになる訳がない。しかしながら、日本の友達からは何年も外国で暮らしているのだから英語がペラペラになっているだろうねなどと手紙が来るものだから、仕方なく英語の家庭教師を付けるという笑えない状況だった。

ヤマハ音楽教室

このような状況のため地元の子供たちと遊ぶ機会もなく、日本人の子供たちだけの世界で過ごすこととなる。数少ない例外としては、他の学校との水泳大会とか、学校が企画する地元の学校との交流会などがあるが、年数回である。

ただ、我が家の息子の場合は、地元の子供たちが学ぶヤマハ音楽教室に小学校１年生の時から入ったため、週１回は地元の子供たちと一緒に学ぶ機会があった。唯一の日本人として、英語で行なわれるクラスについていけるかどうか心配したが、ドレミが共通語ということもあって、帰国の直前まで２年半近く楽しみながら通っていた。もっともそれで友達と個人的に付き合うようになったかというと、全員が親の送り迎え付きということもあり、クラスでの付き合い以上には発展しなかったようだ。

わがまま侮りがもたらすもの

ところで、外国で暮らすということは、その国のルールに従って生活するということになる。日本に住んでいれば、どうしようが日本人であり、そこから追い出されることなど思いもよらないが、外国で暮らしていると、ルールを守らないと追い出されてしまうという不安がある。だからという訳でもなく、その国の常識、ルールに従うというのは外国で暮らす基本的な約束事である。

ところが、時に、特に旅行者の場合、日本の常識、感覚を引きずってきてしまう場合がある。２度続けて起こったために特に印象に残っているのが、日本人男性が酒に酔って女性に触り逮捕された事件である。最初はシンガポールの高級ホテルの西洋式のバーでウェイトレスに、２度目はシンガポール航空の機内でスチュワーデスに。いずれの場合も女性

側の抗議にもかかわらず繰り返したため警察に引き渡され、留置され裁判となり罰金刑の判決を受けた。

これを厳しすぎると見るかどうかは社会風土の違いとしかいいようがないような気がするが、相手の抗議を無視して繰り返したということであり、酔っ払いに対して特別に甘い日本の社会ではともかく、外の社会では許されないことである。自分のムラから外へ出ても甘えが通用するという訳にはいかず、思い上り、蔑視を指摘されても仕方ない。

Two touched woman's buttocks

■TWO Japanese tourists were each fined $1,000 yesterday for touching the buttocks of a woman at the Compass Rose lounge at the Westin Stamford Hotel.

After drinking a bottle of beer on Saturday, XXXXXXXXXX XXXX, 49, and XXXXXX XXXXXXX, 59, touched the woman's buttocks.

When one of them touched her buttocks again despite her protest, she told her supervisor about it.

Both men were detained by security guards as they were about to leave the hotel. The police were called.

〔日本人客逮捕を報じる地元紙〕

<シンガポールのバスとタクシー>

<６月に開催された東南アジア競技大会、サッカー>

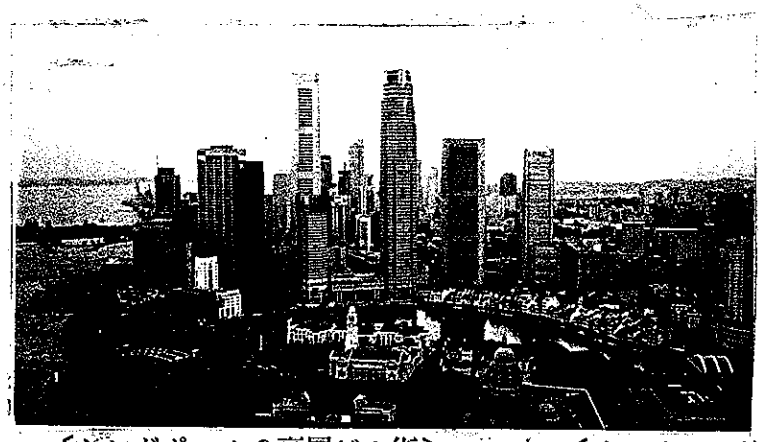
Ⅳ　シンガポールの紹介あれこれ

広島市より小さい面積に広島県の人口

シンガポールの国土面積は広島市よりも１割以上も小さいが、人口は広島県全体よりも多い３百万人もいる。しかもその中にゴルフ場が１１もあり、広島空港の１０倍の面積と成田空港に匹敵する利用客数を誇るチャンギ空港、３つの軍用飛行場、世界最大のコンテナ取り扱い量を誇る国際港、６千haの大工業地帯、緑に包まれた２０ほどの大規模住宅団地、近代的な高層ビル街が納まっている。

これは、最も高い山が１６４ｍという地形的な要因と、国民の９割近くが高層住宅住まいという団地国家づくりによって可能となっているが、その背後にある長期的かつ強力な都市計画の存在も忘れられない。

常夏のこの国は、豊かな緑と年中咲き乱れる原色の花によって、クリーン＆グリーンのガーデンシティというキャッチフレーズで知られているが、このような緑の都市づくりは昨日今日に始まったものではない。１９５９年にリークアンユー前首相が政権の座について以来、北緯１度、赤道からわずか１３７kmという熱帯の国が発展していくためには、緑を基調として快適な生活環境を作らなければならないとの信念の下に、一貫してガーデンシティづくりが強力に推進されてきた成果である。緑関係の予算の６割が維持管理に使われているといわれるほど徹底した維持管理によって、熱帯で成長の早い緑が常に刈り込まれ、美しい状態に保たれている。



〔シンガポールの高層ビル街〕

〔オーチャードロードのショッピングセンター〕

多民族国家、団地国家、強力な政府

シンガポールの３大特徴は、団地国家であること、多民族国家であることと強力な政府である。

団地国家であることは、国民の８７％が政府の公団住宅に住んでいるという数字でも表される。公団住宅のほとんどは分譲であり、国民の持ち家率８２％は、日本の６１％という数字と比べてもはるかに高く、世界でもトップクラスの数字である。なお、最近の公団住宅の広さは１００～１４０㎡であり、しかもそれらが６百万円から２千万円程度で買えるということを考えれば、総じて住宅事情は日本よりもよいと言えそうだ。

多民族国家という点については、人口の７８％が中国系、１４％がマレー系、７％がイ

ンド系となっている。この外にも、コケージャンとかアンモウと呼ばれる白人、ユーラシアンと呼ばれる西欧系と東南アジア系との混血など様々な人々が入り交じって、まさに国際的な多民族国家を形成している。それ故、国として各民族にシンガポール国民としての共通の自覚を持たせることに力を注いでおり、特に独立記念日はそのための重要な行事となっている。

ところで、海外に住む中国系の人は華僑と呼ばれることが多いが、これは場合によっては適当ではないという。華僑、華人、華商とあって、仮住まいという意味の僑の字の使われている華僑というのは出稼ぎ感覚の場合であり、中国系ではあるもののその国の国民としてその国と共に生きていこうとしている場合には華人というのが適当とのこと。ちなみに華商は、末商ということで、その国の人々に同化している場合をいうのだそうだ。したがって、シンガポールの中国系の場合は、華人と呼ぶのが適当ということになる。

強力な政府ということについては、国会81議席中野党議員がわずか４議席ということもあるが、むしろ長期的なビジョンを立てそれを確実に実行してきたという強力な指導力があげられる。都市計画についても、常に先を見た意欲的な計画を立て実行してきた。また、幅広くかつ強力な土地収用権を政府に認め、ゴネ得とは逆のゴネ損とされるシステムを作り上げている。

〔通勤風景：左からインド系、中国系、マレー系〕

〔マレー民族衣装での結婚記念写真〕

四つの公用語

シンガポールは多民族国家であるため、母国語、外国語という言い方ではなく、第一言語、第二言語という言い方をする。

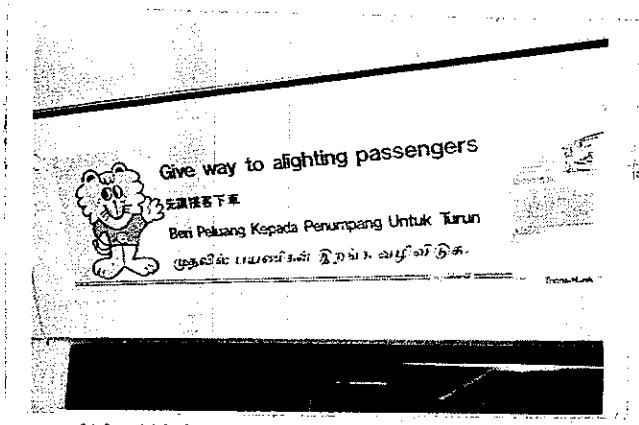
シンガポールの国語はマレー語で、国歌もマレー語である。公用語は、英語、中国語（北京語）、マレー語、タミール語の四つとされていて、電車の中の注意表示などはこの４か国語で表記されているが、行政、企業活動、教育は全て英語によって行なわれており、実質的には英語国家となっている。

このため、英語を第一言語とし、中国語、マレー語、タミール語の三つを第二言語として、全員が小学校から学ぶことになっている。また、小学校の卒業試験の成績が上位１０％以内の者については、中学で日本語、ドイツ語、フランス語のいずれかを第三言語として学ぶことが認められている。なお、第三言語を学ばない子供たちの場合でも、家では北京語とは別の福建語や広東語を話している例も多いので、この場合は、三つの言葉を話すことになる。テレビのニュースも、時間をずらせて四つの公用語でそれぞれ放送されて

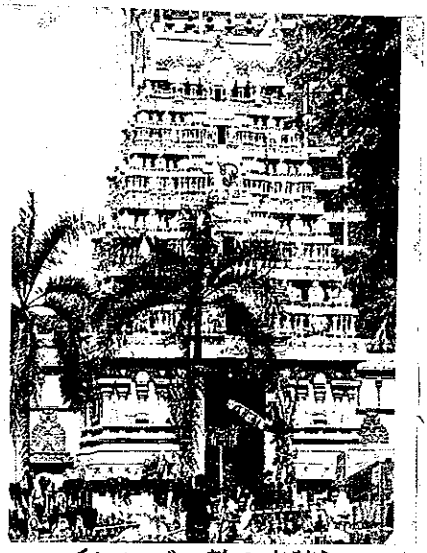
おり、英語の映画に中国語の字幕がついたり、その逆があったりと様々な組合せがある。香港映画はもともと広東語で作られているため英語と北京語の字幕がついているのだが、シンガポール政府の北京語奨励策によって北京語への吹き替えが行なわれている。

このようなマルチリンガルの状況は、一歩間違うと大変な混乱をもたらすような気もするが、実際のところはうまく機能している。社会の基本言語は英語であり、英語さえできれば不自由しない仕組みとなっている。広島事務所の場合も、アシスタントは中国系だが英語の方が得意で、事務所の打ち合せは全て英語、対外的な事務所の仕事も全て英語によって行なっている。

シンガポールでこのように英語が使われているというのは意外に知られていないが、この国は日本人が実践的な英語を身に付けるには最適な場所ではないかと思う。多民族国家における共通のコユニケーション手段として英語が使われているため、その英語はシンプルで分かりやすい。流暢な英語でないと英語でないと思い込まされている人にとっては、英語は所詮意志疎通の手段でしかなく、うまく話すよりも何を話すかが重要だということを実感できる。日本から近く治安も良いため、将来的には良い英語学習の場所となるのではなかろうか。



〔地下鉄内の４か国語による注意表示〕


〔ヒンズー教の寺院〕

裏通りの安心感

シンガポールの治安の良さ、生活水準の高さを示すために、「裏通りの安心感」という言葉を使っていた。どこの国でも首都の表通りはきれいに整備され、近代都市の様相を呈しているが、それが外国人とその国の一部の人たちのための特別な世界である場合もある。この点でシンガポールの場合、外国人と地元の人たちとの間の生活水準の差があまりないために、国中どこに行っても安心感がある。

〔一般的な地元のスーパーマーケット〕

広島から知事が来られた際に、２時間だけ自由時間があるのでどこか案内するように言われ、バードパークにしようかセントーサ島にしようかなどと迷った結果、郊外の住宅団地の中の地元のスーパーマーケットに御案内した。日本的な感覚からすれば何の変哲もな

い普通のスーパーなのだが、それが地元の人しか行かない住宅団地の中の普通の店だということを見て、この国の普通の人々の生活感覚がいかに日本に近いかを感じていただきたかったからだ。

この目的から、他の広島からのミッションもよくこの住宅団地に案内した。ＭＲＴという地下鉄のようなものを使ってこの住宅団地まで行き、このスーパーマーケットやショッピングセンターをみて歩くというのは、普通の人々の生活が感じられて毎回好評だった。

東西南北の交差点

東南アジアというと日本の南にぶらさがっていていつも日本の方を向いてくれているように思う人もあるようだが、実際には世界の東西南北の交差点としての位置にある。西にヨーロッパ、東にアメリカ、南にオーストラリア、そして北に香港、台湾、中国、韓国そして日本。世界をバランスよく見渡せる位置にあると同時に、特にシンガポールは英語社会であることから、世界各国からの情報がダイレクトに集まってくる。

そこはまた、西洋文化と東洋文化の接点でもある。中国系の人でも、西洋風の生活習慣を身につけている人と東洋風の生活習慣を身につけている人とがおり、例えばプレゼントをもらった場合にその場で開けるかどうかなどの細かな点でもその違いが出て興味深い。

ただし、ビジネスの社会は完全に西洋風の個人中心、実力主義のシステムであり、レター社会である。シンガポールに行くまでは英文のレターなど書いたことがなかったので、シンガポール滞在期間を通して週に１回英文レターの個人レッスンを受けに通うはめになった。このレターシステム、特に相手へのレターの写しを同時に第３者にも情報共有のために送付するＣＣ（カーボンコピー）というやり方は、慣れてみると後に記録が残るし確認ができるので便利なものだと感じた。

エクセレントリーダーとエクセレントスタッフ

西洋風の社会システムと感じた点の一つは、企業の社長や部長クラスはもちろん、政府機関の部長、学校長、学部長といった各部門の長の権限が大きく、その個性が大きく反映されることだ。もちろんそれは、厳しく実績と責任が問われることの裏返しでもあり、個人が前面に押し出される社会システムだといえる。

この国の教育制度も優秀なリーダーを育てようというシステムになっており、それはある面ではエリート教育であり学歴社会として表れてしまう。学校の秀才が将来優秀なリーダーになるとは限らないというのは洋の東西を問わず真理だと思うが、限られた資源しかない小国が世界に伍して行き抜いていくためには優秀なリーダーの養成が必要だというこの国の信念には、断固としたものがある。

このような社会では、組織の無名性の庇護の下に無為無責任が許容されることなく、個人の信用、企画力行動力が直接問われ、自己表現能力、判断能力が重要となってくる。学歴・資格偏重主義の問題点も感じるが、実績チェックも厳しく、一旦獲得したポストに安住するという訳にはいかないようだ。また、実力主義の一環として、若手と女性の幹部登用も日本に比べてはるかに進んでいるように感じた。

このような社会の印象の違いを一口で言うと、エクセレントリーダーのシンガポールとエクセレントスタッフの日本という感じである。

シンガポール政府で働く日本人

シンガポール生活で個人的に最も親しくさせていただいた日本人は、シンガポール政府国立公園公団の計画開発部長をされていた稲田さんだった。ランドスケープアーキテクト（景観設計技術者）として、シンガポール政府においてこの国の重要施策である緑の国家開発の一端を１０年間にも亘って担われていた方である。

このように、シンガポールは、海外からの有為な人材の確保・活用に極めて積極的である。香港、イギリスなどの外、ロシアにまでリクルートチームを派遣して海外の人材を誘致しようとする姿勢は、日本では想像もつかないものだ。

いずれにしても、同じ日本人が、厳しい実力主義の世界で１０年にも亘って活躍されているというのは嬉しいことであり、この方の持つ仕事への情熱と素直なひたむきさと柔軟な精神にひかれて、密度の濃いお付き合いをさせていただいた。

この他にもシンガポールの企業や多国籍企業で働く日本人の方とも何人かお付き合いがあり、日本企業に勤める方とは一味違った雰囲気に、日本人の将来の多様な可能性を感じた。

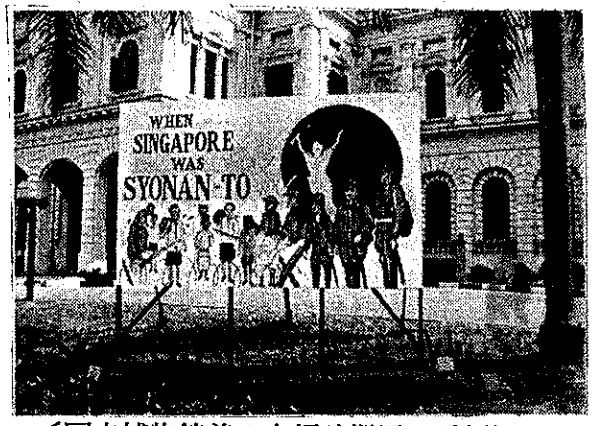
被占領50周年

シンガポールに行って半年目の ’９２年２月１５日に、日本軍によるシンガポール占領の５０周年があった。日本軍の占領期間中の３年半はシンガポールにとって暗く厳しい記憶であるが、とりわけその占領初期に６千人から数万人といわれる中国系の人々を集団殺害した行為は決して忘れられていない。

５０周年に際して、国立博物館では４か月間に亘って日本軍による占領時期展が開催され、テレビでは占領時期の日本軍の残虐行為を紹介するドラマが英語版、中国語版でそれぞれ放送され、赤ん坊まで殺すシーンなど悲惨な記憶を新たにさせた。書店でも、日本軍占領時期についての多くの出版物が積まれた。

これら一連の行事は決して反日感情を煽ろうとするものではなく、悲惨な歴史を事実は事実として語り継いでいこうとするもののように感じた。新聞の読者の投書欄には「忘れることはできないが許すことはできるのではないか。」という投稿が載ったが、そこまで割り切れてはいないにしても、過去の不幸な経験への反省を踏まえて新たな良い関係を築いていこうという意欲は度々感じさせられた。

ただし、タクシーの運転手さんから日本軍占領時期の残虐行為についての話を聞いたこともあるなど、痛みはそれを受けた側では忘れられていない。また、外国人との相互理解が不得手で日本人以外を人と見ないような日本軍のやり方に恐怖感があったようであり、過去の事実についての無知や一人よがりの正当化から驕慢な印象を与えるようなことがないような配慮が必要だとも感じた。親しいシンガポール人から言われた、「日本人はショートメモリーだから」という皮肉を込めた言葉に対する答えを、行動を通じて示していく



〔国立博物館前の占領時期展の看板〕

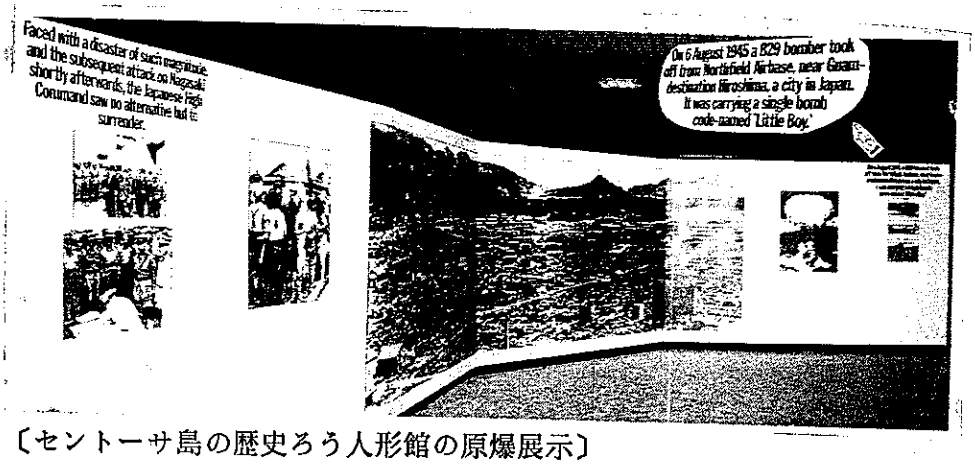
ことが必要だと思う。

５０周年にして日本人としては初めて、日本軍の虐殺による犠牲者の慰霊碑への公式参拝と慰霊祭への出席を許された都甲日本大使に対して、イギリスＢＢＣ放送の記者が、「日本人にはもともと残忍な血が流れているのではないか」という質問をした際、都甲大使は、「日本人が特に残虐なわけではなく、戦争の狂気が人を残虐へと駆り立ててしまうのです。」と静かに答えられたという。この話を忘れず、二度と戦争の狂気に振り回されないように銘記したい。

シンガポールにおけるヒロシマ

シンガポールに来て驚いたことの一つは、ヒロシマの原爆の扱われ方だ。国立博物館でシンガポールの歴史のビデオを見ていた時、日本軍による占領時期の虐殺事件や厳しい生活の紹介の後で、突然大きな効果音と共に原子爆弾のきのこ雲が画面一杯にうつし出され、「かくして戦争は突然に悲惨な終末を迎えた。」とのナレーションがあってショックを受けた。原爆が、戦争の悲惨さの象徴として象徴としてと共に、長くつらかった占領の終結の象徴としても扱われている。観光地セントーサ島の歴史ろう人形館でも、占領時期の展示の後に、一部屋全部を使ってヒロシマの原爆の展示がしてある。

ヒロシマは、被害者としてだけではなく、戦争の悲惨さを知りそれを再び引き起こさないための相互理解の必要性を理解するものとしてのアピールが必要である様に感じたし、そのような広島事務所としての活動理由の説明には、多くの人たちからの共感の手応えを感じた。



〔セントーサ島の歴史ろう人形館の原爆展示〕

南向きの部屋

いくらシンガポールでも太陽は西からは昇らないが、北には昇る。北緯１度の赤道直下のこの国では、春分と秋分には太陽が真東から真上に昇り、日本の夏には北に昇る。このため、日本的な感覚においての「南向きの部屋」とか「東南の角地」といった言葉が持つ「望ましいもの」という響きはない。もっとも、太陽は常に高い位置にあるし、そもそも年平均最高気温が３０．８度という常夏の国ゆえ部屋には太陽が差し込まない方が良いのであり、これも当然かもしれない。

この、年平均最高気温３０．８度というのは、正月も含めて年中通して毎日ほぼ気温が３０度を超えるということを意味する。Ｔシャツに短パンでクリスマスと正月を過ごすと

いうのはそれなりに趣きのあるものだが、これは同時に、年中真夏日熱帯夜ということでもある。しかも、年平均最高湿度が９６％であり、まさに蒸し風呂の世界である。このような気候の違いは当然ながら生活習慣の違いを生み出す。

日本では私もお風呂党だったが、このように暑い国では、折角夜寝る前にお風呂に入っても寝ている間に汗びっしょりとなってしまう。このため、自然に朝起きてからシャワーをする習慣がつき、お風呂からは遠ざかってしまった。

〔真上からの太陽による影〕

暑くて寒い国

年中暑いシンガポールは同時に、寒い国でもある。

事務所をオフィス街の中心部に移した際、部屋の中が寒いのに驚いた。厚手のカーディガンを着てもまだ我慢できない程寒いので、ビルのメンテナンスを呼んでみてもらったら、おもむろに室温を計って、設定温度どおり２１度になっているから故障ではないと言う。外の気温は３０度を超えているのに室温２１度というのはあんまりだからと、冷房の吹き出し口を一部塞いでもらい２５度程度にしてもらったら、今度はアシスタントと来客から暑いとの声が出て結局２３度あたりで手を打った。

この冷やし過ぎというのはデパートや劇場などでも同じで、家族で外出の際にはそれぞれが常に上着を持って出るというのが習慣となった。

シンガポールの雨

シンガポールの年間降雨量は２４００ｍであり広島市の１６００ｍに比べて５割以上も多いが、日本のような長雨の印象はない。

集中豪雨的にドサッと降ってサッとあがる。そんな時にはじたばたせずに雨宿りするのが一番。現に、高速道路には、立体交差の橋げたの下にオートバイ用の雨宿り場所がちゃんと用意されている。いつ降るか分からずしかもすぐ止む雨に備えていつも長傘を持ち歩くことはないということで、長傘を持ち歩く習慣はあまりない。広島企業で長傘の得意な卸し商が雨量の大きさに目を付けて進出したものの、長傘商売はさっぱりだったという笑えない話もあり、外国での商売の難しさ、情報収集の大切さを感じさせられる。

雨の時には、昼間お互いライトを点けていてもすぐ前を走っている車が見えなくなるという状態であり、こんな時に外に出ようものなら下着までずぶ濡れになってしまう。

ところで、シンガポールの雨はいつも局地的に降る。広島市よりも小さい国なのに、雨

〔雨宿り場所の道路標識〕

の降っている場所が限られている。一度などはサッカーグランドの真ん中を境に雨の境界ができるという珍しい経験もした。

外食社会

女性の、特に高学歴の女性の社会進出が進んでおり、共働きの多いシンガポールでは、外食が普通となっている。私の友人たちにも、奥さんが夕食を用意するのは週に数回というのも何人もいた。このため、朝昼夜といつもフードセンター（屋台風食堂街）が賑わっている。何しろ一人２００～３００円で食事ができるのだから、特に小家族ではその方が合理的ということになる。

ところで、シンガポール人の食事で欠かせないのが、「チリ」である。緑色の唐辛子をスライスして酢漬けにしたものがポピュラーであり、日本へ行ったシンガポール人が懐かしがるのもこれである。

なお、毎晩習慣的に同じ職場の同じメンバーと連れ立って飲み歩くという習慣は無く、早く帰宅した夫が家族を連れて食事に出るという光景も珍しくはない。もちろん個人差はあり、金融関係や日系企業と取引のある地元の企業の人たちの中には、日本人の接待を通じて飲み歩く習慣がついたのではと思う人もいた。

〔一般的なフードセンター〕

救急車と消防車

自分の体験を基にした思い込みの恐さを感じさせられたのが、救急車と消防車である。

シンガポールに行って驚いたことの一つが、救急車も消防車もサイレンを鳴らさずに走っていることだ。交通渋滞がほとんど無くスムーズに走れるこの国ならではのことと感心していたが、ある日車で走っていたら救急車がサイレンを鳴らして走り抜けていった。同乗していたシンガポール人の友人に、なぜサイレンを鳴らしているんだと聞いたら、「今日は急いでいるのだろう。」という冗談のような答えが返ってきた。つまり、特別緊急な時には鳴らし続けていくとか、前方の車が障害となるような時に一時的に鳴らすとかといった使い方らしい。

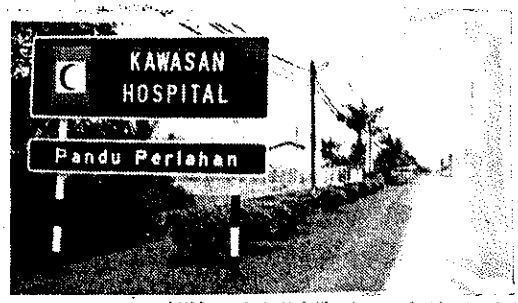
消防車の場合についても、消防車が赤ランプを点灯させながら赤信号で止まっているのを見たときはショックで、さすが外国に来ると色々と違う話があると、広島からの来客に対してシンガポールでは消防車も赤信号で止まるのだと紹介していたら、ある日赤信号を突っ切っていく消防車を見た。随分沢山の人に嘘を言ってしまったと青くなって地元の人に事情を聞いてみると、これは運転手の判断に任されていて、安全に通行できると判断すれば赤信号を無視して通行しても良いが、左右方向の交通量が多くて事故の危険があるときには止まらなければならないとのこと。

いずれの場合も、いくら自分がこの目で見たからといってもそれが全体の正しい理解につながるとは限らず、一定の条件の下での状況だけを見て全体を判断することの危険性を

感じさせられた。

ところで、シンガポールでは全ての道路に名前が付いているが、バス停には全く名前がない。外の景色を見て自分で判断して降りることになる。不便じゃないのかと聞いてみると、何千もあるバス停にそれぞれ名前を付けるなんて大変じゃないかとのこと。道路には袋小路に至るまで名前を付けているのにと思うのだが、習慣の違いとしか言いようがなさそうだ。

もう一つ、消防車についていえば、シンガポールの救急車は日本と同じく赤十字マークをつけているが、隣国マレーシアではイスラム国家ということで異教徒の十字マークは使わず、新月のマークを使っている。従って、赤十字社も赤新月社ということになる。



〔マレーシアの病院の標識と赤新月マーク〕

カラオケ

東南アジアでもっとも普及している日本語は、「カラオケ」ではないかと思う。どこに行っても「KARAOKE」の看板がみられる。インドネシアのスマトラ島の地方都市に行ったときにもちゃんとあり驚いた。ただし、このような場合には客層を反映して、英語と中国語の歌しかない。

シンガポールでも好きな人は多く、レストランなどでもカラオケ付きの個室を持っている例もある。地元の企業経営者の方との付き合いで午後７時から午前１時までカラオケルームにかんづめという経験もした。私はもっぱら聞き役だが、中国語で歌われる日本の歌というのもなかなか風情があり良いものだった。

シンガポールの繁華街であるオーチャードロードには若い女の子のついてくれるカラオケラウンジもあったが、飲み物別で一人一時間約７千円という相場にはついていけず、ほとんど縁がなかった。もっぱら社用族の世界のようであり、日本をそのまま持ち込んだ感がある。

スポーツ

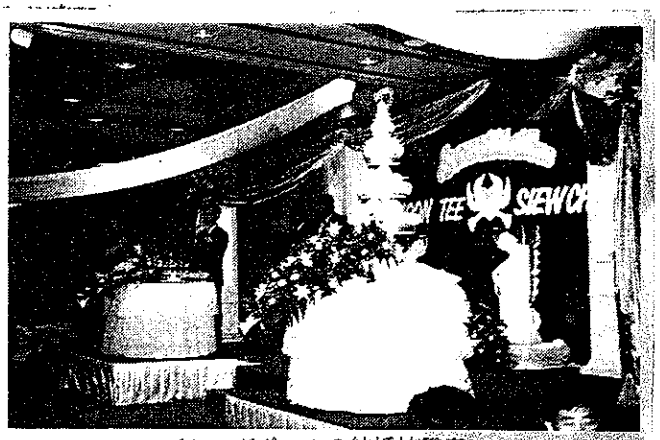
シンガポールで人気のある三大スポーツは、ジョギング、水泳、サッカーとのことだったが、年中３０度を超すという気候のため、あまり屋外でスポーツをしている姿は見ないように感じた。治安が良いので女性が夜遅くに一人でジョギングをしていたり、年中夏のためプールではいつも誰かが泳いでいたりするのだが、全体としてはあまりスポーツが盛んという印象はなかった。特に中国系の人は強烈な太陽の日差しによる日焼けを嫌がるようで、プールでも昼間泳いでいるのは西洋系の人が多く、中国系の人は夕方日が翳ってから泳ぎにきていた。

最近は地元の人たちの中にもゴルフがブームとなっており、ゴルフの打ちっぱなしの練習場にも多くの人が通っていた。広島市よりも狭い国土に１１ものゴルフ場があったがそれでは足らず、隣接するマレーシアのジョホール州やインドネシアのバタム島などにゴルフ場が建設されている。私の知り合いの保険会社の方も、シンガポールでは高くて手が出ないからと、ジョホールのゴルフ場の会員権を購入されていた。

ただ、シンガポールに行ってから運動不足対策としてゴルフを始めた初心者の私としては、３０度を超える焼けつくような暑さの中でどこ行ったか分からないボールを探して歩きながらのラウンドは一種の難行苦行であり、１５ホール目あたりからはひたすらクラブハウスへ帰れるのを待ち望むという情けない状況だった。

〔バードパークでの鳥と一緒の記念撮影〕

〔郊外の住宅団地のショッピングセンター〕


<シンガポールの結婚披露宴>

Ⅴ　東南アジアは一つひとつ

マレーシアとインドネシアの大きさ比べ

広島からの来客に対して東南アジアの概況説明をする際、まず、日本の南の海の果てにごちょごちょと固まっている国々という東南アジアのイメージではなく、視点をシンガポールに移して周囲を見回していただくようにお願いしていた。

その後で、シンガポールの両隣にあるマレーシアとインドネシアとどちらがどのくらい人口が多いと思うかという質問をさせてもらった。この質問に正確に答えられる人はほとんどいなかった。実際には、マレーシアが１千８００万人に対してインドネシアは１億８千万人と１０倍の開きがあるのだが、普段日本のニュースに取り上げられないため、それぞれの国についての基礎知識もなくイメージもないというのが普通のようだ。

東南アジアを理解するためには、まず、東南アジアは一つひとつという当たり前のことから入り、それぞれの国の違いに目を向けていくことが必要だと感じる。

一人当たりの国民総生産

それぞれの国の経済発展の状況、国民の豊かさについても、東南アジア各国でまちまちである。国民の平均的な豊かさを示す数値として私が説明に使っていたのは、国民一人当たりの国民総生産である。

これによると、シンガポールの１２，８９０USドルからインドネシアの６１０USドルまで、その差は実に２０倍もある。もちろんインドネシアにも豊かな人は数多くいるのだが、平均的な人々の豊かさについては、大きな開きがある。

シンガポールの場合、いわゆる普通の人の生活水準が日本のそれに近いため、我々が生活していても違和感が無く、食事にしても住まいにしても外国人用というのではなく普通の地元の人と同じように暮らしていくことが可能である。このため外国に暮らすというストレスが少なく、シンガポールが日本人にとって暮らしやすい国である一つの理由となっている。

もちろん、経済的発展の状況が異なっていても、普通に付き合えることが望ましいのは当然としても、その違いがあまりに大きいと、つい意味のない優越感や劣等感に捉われてしまいがちである。

いずれにしても、それぞれの国の状況をデータも踏まえながらその実像を見るように努めることが必要であり、また、自分が付き合っている人がその社会の中でどの立場にいるのかも考えないと、一面的な理解に終わってしまう危険がある。

東南アジア各国出張

事務所のカバー範囲がアセアン各国であるため、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンといった国にも出張し、各国の経済団体等と協議をしたり、日系企業等を訪問して事業の現状と問題点等を教えていただいたりした。これらを踏まえて、シンガポールを訪問する広島企業の視察団等に東南アジア各国の投資環境などを総括的に説明することになる。なにしろで各国とも郊外に立地する工場を一人で訪問して回るため、タクシーの料金交渉や場所探しなど団体旅行では味わえない経験をすることができた。

バンコクの非常事態宣言

タイは英語が通じにくいこともあり私にとって苦手な国の一つだったが、非常事態宣言にもぶつかってしまった。'９２年５月にタイの企業訪問を予定していた時に、シンガポール出発の数時間前に友人のルートから、軍隊と民衆の衝突による非常事態宣言発令のニュースが飛び込んできた。しかしながら、既に訪問先企業のアポは取ってあり飛行機や宿の手配も済ませてあるので、とにかく行ってみることにした。

飛行機の中やバンコクの空港も特に変わったことはなかったが、市内には既に不安が広がっており、予定していた友人との夕食はキャンセルした。翌日も、郊外の工場訪問２件は予定どおり済ませたものの、市内のオフィスは全て閉鎖になったとのことで、その後の予定はキャンセルせざるをえなかった。ホテルへの帰路、高速道路を軍の装甲車が一車線を残して閉鎖しており、自動小銃を持った兵士が検問をしているのを見て、初めて実感が湧いてきた。翌日はバンコクから１４０kmほど離れた工場を訪問することにしていたが、帰りが暗くなると危ないと思い、予定を早めて朝早く出発することとした。このことを相手の工場に電話連絡しようとするのだが、悪名高いタイの電話でなかなか通じない。公衆電話を見つけても３回に１回しかコインが引っ掛からず、そのまた３回に１回しか発信音がでない、やっと発信音にたどりついてもつながらない、といった作業を延々続けても結局だめで、最後にはガソリンスタンドに飛び込み事情を説明して事務所の電話でトライしてもらう。やっとの思いで連絡が取れた時にはもう工場のすぐそばまで着いていたという笑えない状況だった。

こんな状況で当方が緊張しながら走り回っているというのに、私が宿泊していた街外れの安宿の周りには特に変わった様子はなく、タクシーの運転手は夜遊びの誘いをかけてくる。新聞やテレビの報道は一体何なんだと思っていると、広島からホテルへ電話がかかってきて、日本では大騒ぎだ、何でそんな危険な所にいるんだとのこと。そんなものかと思って、早めの飛行機に変えようと連絡を取ると、軒並みフライトがキャンセルされており動きが取れない。結局予定どおりの飛行機でシンガポールに戻った。シンガポールに帰ってから日本語の新聞をみると随分センセーショナルな表現で報じてあり、初めて危機感が湧いてきた。

〔バンコクの街角〕

〔非常事態宣言２日目のタイの新聞〕

マレーシアとマハティール首相

シンガポール以外で最もなじみやすいのはやはりマレーシアだった。この国は急発展を

遂げており、地方にいたるまでその息吹が感じられる。自分で車を運転したのも、シンガポール以外ではこの国だけだった。

シンガポールのリークアンユー元首相が退陣した後、東南アジアで最も魅力的なリーダーはこの国のマハティール首相ではないかと思う。特に印象に残っているのは、同首相のサルタンとの対決だった。マレーシアの１３州のうち９つの州にはサルタンがおり、これらのサルタンが５年毎に互選で国王を決めている。サルタンは、それまで民事上刑事上とも憲法で免責が定められており、しかもその憲法はサルタンの同意がなければ改正できない仕組みになっていた。しかしながらこのような特権の上に、高級車の輸入関税の無視、森林伐採権の乱売、一般人の殴打事件などサルタンの横暴はひどくなる一方で、首相就任１０年のマハティール首相がついにサルタンとの全面対決に踏み出した。一時は憲法上の保障規定に守られたサルタン側が勝利しマハティール首相の政治生命が終わるのではないかとまで報じられたが、それまで誣告罪によって守られていたサルタンの乱行の暴露戦術等によって世論を味方にした首相側が最終的にはサルタンの譲歩を引き出し勝利を治めた。この間半年余り、東南アジアの人々はその行方を息を詰めて見つめていた。

この時のマハティール首相の、毅然としながらも淡々と信じる道を進んでいく姿ほど、リーダーのあり方を見せつけたものはなかった。

〔マレーシアの地方都市〕

〔マレーシア地方都市郊外のモスク〕

インドネシアと赤味噌

インドネシアについては、クリーンで効率的な緊張感を維持した行政組織の必要性も認識させられたが、それと同時に厳しい環境下で頑張っている日本人の姿も印象に残っている。

〔インドネシアの地方都市〕

〔インドネシアの日系企業の工場〕

３００もの種族からなる１億８千万人のこの国は、極めて多様な側面を持っている。地域によって話す言葉や外見も異なり、中には日本人そっくりな人々もいて黒潮でつながった日本人のルーツの一つを感じさせられる。

首都ではどの国でも日本食が手に入るが、インドネシアのように大きな国では国中どこでもと言う訳にはいかないだろうと、ジャカルタから離れた地域にいくときには事前に土産としての希望の品を聞いていった。バンドンに行った際には、赤味噌がいいとのことで、いくつかの訪問先合わせて７kgの赤味噌と３kgのシンガポール名物の干し肉を持参した。税関で干し肉のビニールパックを見咎められてこれは何だとの質問に、シャツをビニール袋に詰めているんだと言い逃れたことなども、今となっては思い出の一つである。

フィリピンの光と影

発展途上国では貧富の差が大きくそれがやりきれない思いをさせることがあるが、フィリピンの場合光の部分が明るいだけに影の部分がより強調して感じられる。

マニラのマカティ地区のオフィス街や塀で囲まれた高級住宅地とトンド地区のスラム街、華やかなフェスティバルとそれには無縁な人々。

フィリピンの場合も国の中での地域による違いは大きい。マニラのあるルソン島と中南部のセブ島辺りでは人々の感じもその意識も大きく異なるように感じた。

いずれにしても、個人個人は大変魅力的なフィリピンの人々が、緊張感のある集団としての力を発揮して、新たな時代へ飛躍していくことを期待したい。

〔フィリピン、セブ州副知事と自治体駐在員〕

〔フィリピン、檻で守られた自動車〕

ベトナムの憂鬱

ベトナムには２回にわたって延べ２週間滞在したが、この国は日本人にとって最も親近感を感じる国の一つではないだろうか。人々は向学心に燃え意欲的であるし、食物についてもあまり違和感がない。中国の漢字を日本と同時期に習ったためか、注意とチューイなど同音で同義の言葉もある。

しかしながら、だからといってすぐに日本企業が進出して成功できるかどうかについては、色々な問題がある。通信、電気、輸送等のインフラの未整備の問題とともに、社会政治体制の問題もあるようだ。シンガポールの友人の経営者がベトナムで合弁事業をスタートさせているなど色々な話を聞く機会があったが、ベトナム戦争の英雄たちで構成される上層部と新進のテクノクラートで構成される中堅層との意見調整の問題、簡素でクリーン

で効率的な行政システムの構築など、まだまだ解決すべき課題は多くあり、将来の展望についても予断を許さないところはある。

とはいっても、将来その国民性からみて大きく発展することは間違いなく、2度目の訪問の際には、広島県の技術研修員受入制度の枠をもらい、将来に備えてのパイプづくりのためにベトナム商工会議所の職員1名を受け入れる調整を行なった。

〔ベトナム、ホーチミン市の街角〕

〔ホーチミン市の戦争犯罪博物館〕

サラワクの息吹

シンガポール生活の最後の時期に、東マレーシアのサラワク州を訪問し、州政府の首相らから直接話を聞く機会に恵まれた。

この時に感じたのは、発展途上国と一口に言っても、そのリーダーたちは世界の中での自分たちの位置付けを常に考え、その中で幅広く情報を収集し自分たちにとって最良の選択をしようと努力しているという点だった。

東南アジアは東西南北の交差点であり、常に世界の情報が交差し、リーダーたちはその中で、自国の進むべき将来方向を展望し、それに添った協力関係を築けるパートナーを探している。

そこに住んでいる人たちが自分の国を愛し、将来に目を向け、自分を律して取り組んでいる国には、良質の緊張感が感じられ、「張り」を感じるしそれがその地域の魅力となるようだ。この点で、サラワク州のリーダーに会って直接話をする機会が持てたことは、サラワクの明日への息吹を感じることができ、良い経験となった。

〔マレーシア、サラワク州首相官邸〕

〔サラワク州の州都クチン上空から〕

Ⅶ 幕切れ

任期延長意見書

シンガポール事務所長の任期は３年ということにされていたが、私の場合広島での４か月の設置準備期間があったために実質２年８か月ということになってしまった。３年目になり事務所の活動が軌道に乗りかけたところで、事務所長としての任期延長の意見書を２度にわたって提出した。

その中では、海外での仕事は特に事務所と個人に対する信用を中心に成り立つこと、継続性が重要であること、ゼロからのスタートで２年８か月というのはこの点で短すぎ、信用が獲得できこれからという時に帰るようになること、といった問題点を指摘した。

２年目にもこれらの問題点は感じていたが、体力的に厳しいことから任期延長を言いだす自信がなく見送っていた。ところが、３年目に入りそれまで築いてきた信用を基に内容の充実した色々な事業が新たに動きだすとともに、それをさらに発展させていく責任を感じだした。依然として体力的には自信がなく不安ではあったものの、それまでの蓄積の上に動きだした事業をもう少し大切に育てていきたいとの思いの方が強くなってきた。

しかしながら、一旦決まっていることを変更しようという話にはならず、現場の思いとは別に交替が再確認されてしまった。

忘れ得ぬ人々

シンガポール広島事務所での日々は、多くの魅力的な人々との出会いだった。ともすれば分かったような顔をして流れに身を委ねてしまう人が多い中で、それらの人たちは、自分の感性を大切にし、しかも力強く生きていた。懸命に夢中になって生きることが恥ずかしいことではなく、夢や感性を大切に過ごしていくことが意味のあることだと感じさせてくれた。これらの人々との出会いは私の財産であり、次にまたその人たちに出会ったときに恥ずかしくないように、自分自身の「張り」を保っていかなければと感じさせられた。

シンガポール女性団体連合会タン会長

シンガポール生活の終盤に、忘れられない経験をした。

シンガポール女性団体連合会のタン会長に、’９４年７月に広島で開催予定のアジア女性フォーラムへの出席依頼に行き、１時間ほど事務所の活動理念や状況などを雑談がてら話していた時に、突然タン会長が「あなたがシンガポールでもう少し仕事ができるようにするためには私は誰に手紙を書けばよいのか。あなたは、シンガポールに来て、土を耕し種を播き今やっと若芽が出たところではないか、なぜ今シンガポールを去ってしまうのか。私は真剣に手紙を書きたいと思う。」と言い出された。その場では日本の習慣としてそのようなことは適当でない旨を説明したが、手紙を書く書かないで１０分以上やりとりがあった。

シンガポールに来て以来３年弱、明日が見えずに夢中になってやってきたところで突然終わりが目の前に表れた感じでいささか参っていた自分にとって、会長の言葉は、この上もなく暖かく、自分のそれまでの努力を認めてくれるものだった。この外にも、手紙を書こうかという申し出は何度か受け、その度に同じような説明を繰り返した。

別れ

シンガポールを去るに際して、お世話になった人々に挨拶状を発送したが、それに対して、３０人程の人々から返事をいただいた。それらの多くは、私を涙ぐませるに十分な心のこもったものであったし、それを恥ずかしく感じさせないほど暖かなものだった。

この他にも、お別れに食事をしようとの誘いも何件もいただき、心のこもったプレゼントや言葉に感情のやり場に困ることが多々あった。

単に県庁から外に出たいとの思いから希望した海外事務所勤務であったが、それだけでは割り切れない重いものを後に残している。

これからの仕事の中に、シンガポールでの重い経験を生かしていきたいと思うし、またいつの日かシンガポールに帰りたいと願っている。

〔シンガポールポリテクニック校副学長らによる送別会〕

〔南十字星、中央上部でやや左に傾いている〕

エピローグ

このように、私の初めての海外勤務は、あっけない幕切れを迎えた。

今、日本に帰り、遠いシンガポールを懐かしむ余裕もなく過ごしている。あるいはそのような状況に自分を追い込んでいるのかもしれない。その思いに正面から向き合うには、まだ記憶が生々しすぎるから。

このメモは、そのような時期の自分の思いを何とか整理するために書き出した。言い過ぎの点も多いかと思うが、もとより不特定多数の人々に読んでいただくためのものでもなく、勘弁いただきたい。

シンガポール滞在期間：　1991年８月８日～1994年３月31日　　２年８か月弱

広島からの訪問団体数：　　１０８件
　〃　　人数：　１，１３２人
　〃　訪問斡旋件数：　　２３７件

広島への訪問団体数　：　　１８件
　〃　　人数：　　９８人
　〃　訪問斡旋件数：　　６１件

来客、面会などの事務所活動延件数：　１，２８７件

交換した名刺の数（日本からの来客分を除く）：約１，２００枚

補記

このメモは、シンガポールから広島に帰って２～３週間の時点で書いたため、シンガポールでの高揚した気分が抜けておらず、改めて読み返してみると、かなり表現に不適切な点、言い過ぎている点が目に付く。特に、県の組織、仕事に関わる部分についてそれを感じる。もとより、どのような仕事であっても、責任感をもって懸命に取り組む以上、楽な仕事というのはなく、特に県の仕事の場合、その影響する範囲の大きさ、複雑さ、責任の重さなどから、繊細な注意と大きな努力とが要求される。その仕事の大変さ、困難さについては、復帰後１か月余りを経過して改めて思い知らされているところである。

しかしながら、個人の直接的な思いというのは、思い上りや一人よがりな部分から無縁であることは難しく、復帰直後の生々しい感情の表れということで、本体験記の中のそうした問題点についてはご容赦願いたい。

なお言うまでもないが、文中の意見は全て個人的なものである。

（県への復帰後１か月余りを経過した１９９４年５月記）